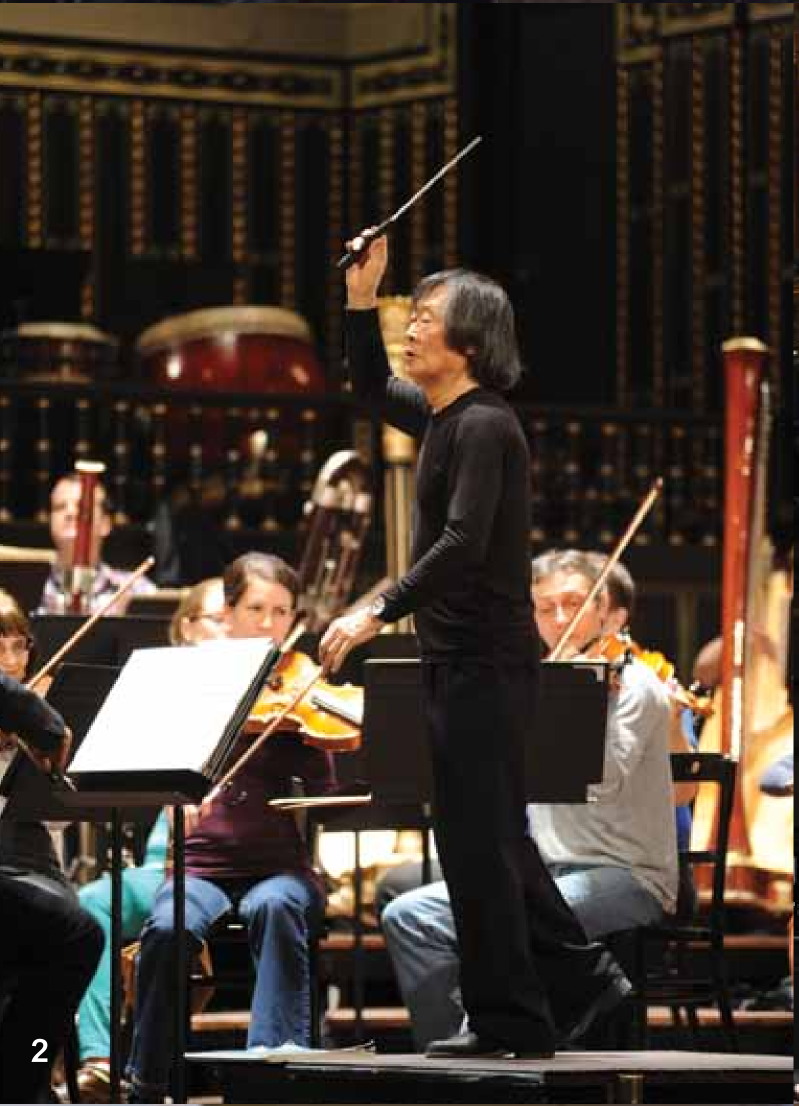
The Danube Quarterly

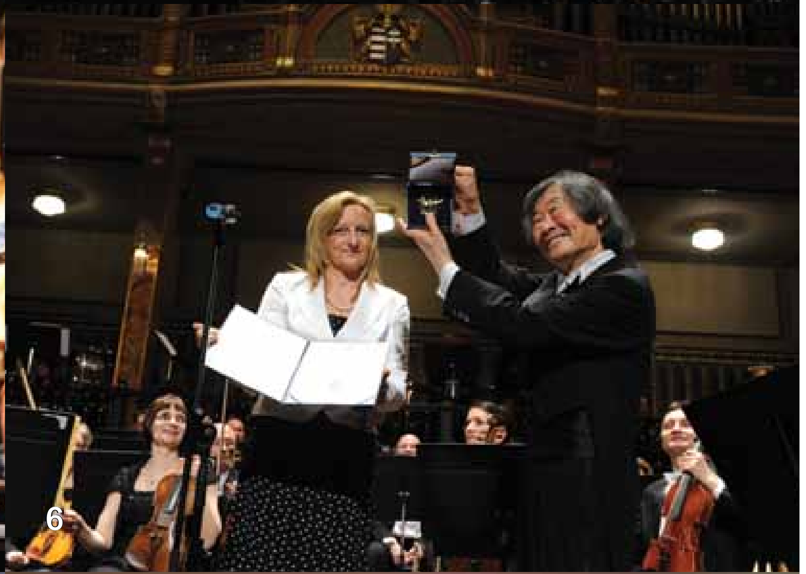
ドナウの四季

「小林研一郎ハンガリーデビュー40周年」特集

報告と謝辞	盛田 常夫	1
コバケン・レジェンド	盛田 常夫	2
ハンガリーの人々に愛される日本の音楽大使	山本 忠通	4
音楽教育研修とコバケンのゲネプロ	伊藤 直美	5
指揮棒の先に	坂井 圭子	6
生まれて初めてのオーケストラ	木村 麻規子	7
人生最高のコンサート	薄井 さやか	8
コバケンさんの思い出	小村 陽子	8
ジュール・コンサートの余韻	森田 友子	9
清帰途太鼓の歴史的共演	高久 圭二郎	10
マエストロとの夢のレコーディング	金子 三勇士	12
ディプロマコンサート情報		13
留学生自己紹介	榎本 瑞季・森 由香里・矢嶋 杏里沙	14
日本人学校	渡辺 一輝・實取 優樹	17
みどりの丘日本語補習校	カルドシュ イロナ・望月 海央・畑山 去來	18
ハンガリーゴルフ回想録	坂下 昌平	20

在留邦人の季刊誌／The Japanese Community Bulletin





1 & 2: MÁVオーケストラとのゲネプロ風景　3: Gál Erikaとのリハーサル（マラー「交響曲第2番）(撮影: Fejér Gábor)
4 & 5: MÁVオーケストラとのコンサート　6: MÁV総裁から「国鉄総裁賞」受賞 (写真はMÁVオーケストラ提供)
7:TV2ニュースキャスターAndor Évaとのインタビューを終えて (撮影: 盛田)

報告と謝辞

プログラム統括責任者
盛田　常夫

「コバケン」こと、小林研一郎が指揮者としてのデビューを果たして今年で40年。1974年5月に開催された第一回ブダペスト国際指揮者コンクールで優勝した小林の指揮者人生は、まさにここブダペストで始まった。デビュー40年の今年は、3月から4月にかけて、小林が5つのオーケストラを指揮する、ブダペストと地方3都市で7つのコンサート・シリーズで節目を祝うことになった。

3月14日のマーラー「復活」（国立フィル・国立合唱団）に始まり、19日（ブダペスト）と22日（ペーチ）のオルフ「カルミナ・ブラーナ」（ハンガリー・ラジオフィル、ラジオ合唱団・児童合唱団）、26日のベートーヴェン「交響曲第9番」（リスト音楽院学生オケ・合唱団）、30-31日のベートーヴェン「第3番英雄」（ジュール・オケ、ショプロン、ジュール）、4月3日のベルリオーズ「幻想交響曲」（MÁVオケ）で終わった。この最後のコンサートでは、和太鼓グループ（清帰途太鼓）の参加をえて、小林作曲「パッサカリア」より「夏祭り」がアンコール曲として演奏され、オーケストラの打楽器と和太鼓の競演で、歓喜と大声援の中でコンサート・シリーズを終えた。

この記念コンサートは1年以上前から準備され、各オーケストラ、芸術宮殿、リスト音楽院の共催として実現したもので、コンサート開催にあたり、多くの方々に協力をいただいた。

何よりもまず、MÁVオーケストラ代表レンドヴァイ・ジョルジュ、国立フィル代表コヴァチ・ゲーザ、芸術宮殿プログラム制作部長バートル・タマーシュには、企画当初から各オーケストラとの日程調整で奮闘していただいた。リスト音楽院バッタ学長には春の音楽祭の日程をやり繰りしてもらい、会場確保にこぎつけた。コヴァチ・ゲーザとは、彼が1994年に旧国立フィル（ÁHZ）代表に就任して以来の友人だが、小林研一郎は音楽監督を辞めた経緯から、長い間、国立フィルを指揮することがなかった。10年以上の歳月を経て、漸く国立フィルとの共演が実現したことを喜びたい。オーケストラや合唱団もたいへん喜びようだった。小林研一郎にとっても、再び国立フィルとの新しい関係が構築できるきっかけとなった。今年6月の国立フィル日本公演実現に際しても、小林と国立フィルの関係修復が新たな一歩を踏み出すものになった。

コンサート・シリーズの統一プログラムを制作するにあたって、ハンガリー日本商工会より寄付をいただいた。ここに記して感謝したい。プログラムに使用した写真はMTVAから無償で提供していただいた。また、日本大使館にはコンサートが終わった4月7日に、大使公邸にて、音楽関係者を招待したレセプションを開いていただいた。ここに記して、お礼申し上げたい。

小林研一郎が優勝した国際指揮者コンクールは、MTV（ハンガリー国営テレビ）が主催したものである。今次のシリーズ開演にあたり、MTVA（ハンガリー国営放送ホールディング）社長から祝辞をいただいたいのは、そういう理由からである。また、スポンサーがつかない番組制作を渋っていたMTVAも、社長の祝辞があってから番組制作に動き出し、漸く最後のMÁVコンサートのゲネプロから撮影を開始し、小林との長時間のインタビューや、大使公邸レセプションの撮影を行い、5月3日にM1チャンネルで小林研一郎のドキュメンタリー番組を放映することになった。

各コンサートの合間に、新聞社やテレビ局、ラジオ局からのインタビューがあり、TV2のニュースステーション「Tények」にもゲストで迎えられ、キャスターのアンドル・エーヴァとの20分のインタビュー収録があった。Népszabadság紙には大きなインタビュー記事が掲載され、クラシック・ラジオとのインタビューもあった。

NHKのウィーン支局からは3月14日のコンサートに記者が派遣され、写真付き記事がインターネットで配信された。また、共同通信社もウィーンから記者を派遣し、配信記事が日本の各紙に掲載された。

ハンガリーの政治家にクラシックファンは多い。今回は総選挙直前だったために、首相の姿は見られなかったが、アーデル大統領夫妻が文化大臣夫妻とともに、3月26日のリスト音楽院でのコンサートを鑑賞された。大統領が鑑賞される時には午後から会場周辺の交通規制が行われ、指揮者を乗せた車も会場に近づけない。このような本末転倒した現象は何とかならないものかと思う。

翌3月27日には、アーデル大統領夫妻が大統領公邸に小林夫妻を夕食に招かれ、邸内を案内された。政党活動から解放されているので、この時期、大統領には時間の余裕があるということだった。小林夫妻の公邸到着時にHír　TVのインタビューが行われた。

今次のコンサート・チケットは発売とともにほぼ完売となり、コンサートが始まる数ヶ月前から入手不能であった。とくに地方公演のチケットの入手は困難で、指揮者用に確保された招待チケットを、各地方都市に在住されている邦人の方々にお渡しして喜んでいただいた。また、MÁVコンサートは年間会員優先のコンサートのために、一般販売向けのチケットがなかった。そのため、ゲネプロを公開して、音楽ファンの要請に応えることになった。とくに宣伝されたわけではないが、600名ほどの聴衆がゲネプロを鑑賞するチャンスが与えられ、小林研一郎もその聴衆の熱意に応えて、プログラム全曲を披露した。コンサートより充実した内容になった。

MÁVコンサートが終わったところで、MÁV（ハンガリー国有鉄道）総裁から、「国鉄総裁賞」が授与された。小林にとって、「国鉄総裁賞」は、国立フィルオーケストラ桂冠指揮者、ハンガリー文化大使、リスト音楽院名誉教授に次ぐ4つ目の称号となった。

小林人気を改めて再認識したハンガリーの各オーケストラは、来年だけでなく、再来年もコンサートの企画を提案してきている。とりあえず、来年は5月の最初の3週間に、ブダペスト、ジュール、ヴェスプリームでコンサートを開催する予定である。

今後とも、在留邦人の皆さまの温かいご声援をお願いしたい。

（もりた・つねお）

コバケン・レジェンド
小林研一郎ハンガリー・デビュー40周年

盛田　常夫

記念コンサート

私にとって、コバケンの祝賀企画はこれが三度目である。1994年には、ブダペストにオープンしたケンピンスキーホテルの大広間で、国立フィルのメンバーの余興演奏を中心に、音楽家や関係者を集めてデビュー20周年を祝った。ちょうどコバケンとともに演奏旅行に来ていた早稲田大学グリークラブにも参加してもらい、350名ほどの音楽仲間で、大広間が埋め尽くされ、午後7時から深夜まで楽しい演奏会が続いた。この模様は当地のDuna　TVの50分番組として、繰り返し放映された。

2004年には、ハンガリー科学アカデミー本部大講堂で、デビュー30周年の記念コンサートを開いた。この時は国立フィル・メンバーの室内楽、コチシュのピアノに加えて、ハンガリー・ラジオ児童合唱団、ハンガリーで活躍する日本人音楽家が演奏した。およそ650名の招待客だけのコンサートだった。

そして今年の40周年である。用意されたプログラムは、「コバケン」18番中の18番、コバケン・ワールドが実感できる曲目のオンパレードである。最後のコンサートは、小林作曲「パッサカリア」から「夏祭り」をアンコール演奏して締めた。これはコバケンがオランダと日本の通商400年を記念して、オランダ政府から委嘱されて作曲したものである。幻想交響曲を終えたMAVオケの打楽器と当地で活躍する和太鼓グループ（清帰途太鼓）の競演で会場は最高潮に達し、盛況のうちに記念コンサートを終えた。

第一回国際指揮者コンクール

ウィーン、ブダペスト、プラハはいわばクラシック音楽のメッカである。ハンガリーには各行政区に国立の音楽学校があり、音楽教育の底辺を支えている。現在日本で売り出し中のピアニスト金子三勇士君も、日本の幼稚園を卒園してすぐにハンガリー人祖父母に預けられ、そこから現地の小学校に通いながら、放課後にヴァーツ市の音楽学校に通っていた。ハンガリーでは年齢ごとの地域コンクールや全国コンクールがあり、小学生時代から金子君はピアノ部門だけでなく、民謡歌唱やソルフェージュで常にトップか、上位3位以内の成績をとっていた。コンクールに児童を引率して参加していた妻から、「日本人ですごい男の子がいる」と聞かされ、それで金子君を探して、日本の行事に送りだした。金子君は13歳でリスト音楽院の英才教育課程に入り、そこを卒業した後に、東京音大付属高校3年に転籍し、その後東京音大を卒業して、今日本で最も売れっ子の若手ピアニストの一人になった。

クラシックが盛んなハンガリーであるが、若者のクラシック離れは著しい。クラシックの人気回復も図って、1974年にハンガリーは国際指揮者コンクールを開催した。ハンガリー国営テレビ（MTV）主催で、ハンガリー国立フィル音楽監督である巨匠フェレンチック審査委員長のもと、オーストリアやドイツの著名音楽家を招聘して、1ケ月近い長丁場の国際コンクールが挙行された。指揮者のみならず、ソロの演奏家を目指す若手音楽家にとって、国際コンクールでの受賞は音楽家生命を左右する。コンクールの受賞歴がなければ仕事がもらえないのがこの世界である。

1974年のハンガリーは、TVが国民に普及して間もない時期で、TV鑑賞が唯一の娯楽と言っても良い時代。夜のゴールデンアワーをふんだんに使い、第1次予選から最終第4次審査の様子が、毎夜、国営テレビで放映された。多くの家庭では、両親とともに子供たちもこの面白いコンクールに見入るのが日課になった。国際審査員14名が20点の持ち点で若い指揮者の指揮振りを評価し、最高点と最低点をカットした12名の評点が加算され、電光掲示板に表示される。まるで体操競技でも見るような光景である。TVの前で皆、一喜一憂して、このコンクールの模様を楽しんだ。

ヨーロッパ各地から参加していた若手指揮者を押さえ、クラシックの世界からほど遠い国からやってきた小林研一郎が、第1次から最終第4次審査まで、すべてトップで通過するという快挙を成し遂げた。この詳しい模様は、小林研一郎『指揮者のひとりごと』（騎虎書房、1993年12月）に詳しい。優勝の日から小林の指揮者人生が、大きく回り始めた。小林はハンガリーが生んだレジェンドになっただけでなく、指揮者としての格を得ることになり、指揮者としての本格的な活動が始まった。

ハンガリーではリスト音楽院でのガラコンサート以後、地方都市でのコンサートが次々に開催された。今回のコンサートでも、40年前のコンサート・プログラムや小林のサインが入った写真を持参する年配者に何度も出会った。コンクールで最初に振ったオーケストラがMÁVオケで、しかも今回のプログラムに入った「セビリアの理髪師序曲」は最初の課題曲だった。小林は最初の一振りで飛び出したオーケストラの音色を忘れることができないという。

小林は第二次予選でドヴォルザーク「新世界」第四楽章をハンガリー・ラジオオケと振ったが、制限時間より早く指揮を終えたために、2名の審査員の評点が加算されずに電光表示され、最下位に転落した。ところが、すぐに2名の評点が加算修正され、最下位からトップになるというハプニングがあった。この時の会場がハンガリー・ラジオのリハーサル室で、ラジオ・オケとの最初のリハーサルで、小林の口からこのエピソードが語られた。

レジェンド

こうして小林研一郎は指揮者としての本格的な道を歩むことになり、他方ハンガリー人にとっても小林研一郎は記憶に深く刻まれたレジェンドになった。

さすがにハンガリーでも、クラシック・コンサートの聴衆の平均年齢は高い。オーストリア国境に近いショプロンの小さなホールに集まった聴衆の平均年齢は60歳を超えていた。その聴衆の中にも、ハンガリーのデビュー当時のプログラム冊子や写真を抱えてくる婦人たちがいた。

小林の前に指揮者として国際舞台で活躍できた日本人は、小澤征爾しかいない。ソロの演奏家で国際的に活躍してきた人はそれなりにいるが、指揮者となると非常に限られる。それはサッカー監督が置かれて状況に似ている。いかに本田や香川が活躍しようと、また日本のサッカー指導者が欧州リーグのチームを率いることは難しい。本場欧州のレベルと日本のレベルにはまだ超えることのできない大きな壁があり、個人としてそれを突破できても、組織を束ねる指導者としてこの壁を突破することは難しい。小沢や小林は音楽の世界の大きな壁を乗り越えて、世界の最前線で勝負している音楽家なのである。このことを理解できる日本人は少ない。

東洋から来たクラシックと縁のない国の音楽家が、本場の有望株を押しのけて、どうしてクラシックのメッカでレジェンドになれたのか。本場の専門家を唸らすものがあったからに違いない。
ヨーロッパの常任指揮者や音楽監督にとって、コンサートは練習の延長上にある。だから、日ごろの練習やトレーニングに精力的に取り組むが、コンサートの指揮者としての動作が重要視されることはない。日ごろの練習がオーケストラの技量を上げる基礎になるから、それがしっかりしていれば、コンサートで無駄な動きをする必要はないというのが、指揮者にたいする常識的な考えである。
これにたいして、小林はオーケストラの技量の向上を自分の課題と捉えておらず、オーケストラの既存の技量を前提にして、そこから限られた時間でコンサートへと導くのが指揮者だと考えている。その意味で、常任指揮者というよりは、客演指揮者として当該のオーケストラの技量を最大限に発揮できるような作品形成を考えている。小林にとって、コンサートは指揮者がオーケストラと融合して、生きた音楽を作り上げる場なのだ。したがって、小林は短期間のリハーサルの最初から、感情移入しながらオーケストラに指示を与えていく。指揮者が感情込めて指揮することで、オケのメンバーの演奏意欲が掻き立てられる。しかも、類稀なるタクト捌きが感情移入を加速する。指揮台を自在に動きながら、時には小さく飛び上がり、体全体で指示を表現する。オーケストラにとって、このような指揮者と共演することが演奏の楽しさや喜びを生みだす。いかにオーケストラの技量があっても、単調に演奏すれば、つまらないものになってしまう。オーケストラを構成するのも生身の人間だから、やはり彼らをやる気にさせて、百％の能力を引き出すような指揮が、ライブのコンサートには必要なのだ。

小林の登場によって、ハンガリーではクラシック・コンサートに通う人が確実に増えたと言われる。生演奏の楽しさを体感させてくれる小林は、並みいる指揮者の中でも、特別の地位を確保している。まさに、本場の指揮者が忘れたものを、クラシック音楽のメッカから遠く離れた東洋から来た日本人が改めて気付かせてくれたのだ。

文化的価値を知る

1994年の20周年記念パーティ、2004年の30周年記念コンサートには、当地の商工会加盟各社代表のほとんどが夫妻で参加した。今回も、日本商工会から記念コンサートへ寄付をいただいたが、残念ながら7つのコンサートに商工会加盟企業の代表の姿は見えなかった。この20年の間に、商工会加盟企業の構成が大きく変わったこともあるが、なんとも寂しい限りである。

日本から派遣されてくる最近の日本人社員の多くはクラシックに関心がない。薄っぺらな娯楽が蔓延している日本の文化状況を考えれば、仕方がないことかもしれないが、「ハンガリーには日本のような娯楽がない」と嘆くのは間違っている。日本に蔓延している娯楽は文化の範疇に入らない。赴任した国がもっている最高の文化的価値を知り、それを楽しむ余裕がなければ、ハンガリー、いや欧州に赴任してきた意味がない。欧州に赴任しても、趣味はカラオケとゴルフというのは情けない。こういうことを教えるのも、会社のトップの役目の一つ。文化的素養がなければ、日本の企業人は国際人として認知されない。

赴任した国や地域の最高の価値を吸収するという貪欲さは、新しいビジネスを展開する能力とも密接に関係している。目先の仕事や利益に埋没してしまうのではなく、未知の価値を積極的に探り、我が物にするという姿勢こそが、国際人として持つべき姿勢でなければならない。そうでなければ、一介の社畜に堕するだけである。

一言付け加えておけば、コンサートでは駐在員のご夫人たちにお会いすることができた。ご婦人たちの方が、新しいものを吸収する能力がある。ご主人たちも奥方たちに学んで、新しいものに目を向ける努力をするべきではなかろうか。ハンガリーが生んだ最高傑作の一人、コバケンをハンガリーで直に見て感じることができるのだから。

（もりた・つねお　「ドナウの四季」編集長）

ハンガリーの人々に愛される日本の音楽大使

山本　忠通

これほど人々に愛される指揮者がいるだろうか。満場の割れるような拍手を聞いてそう思った。ペーチ市コダーイ・センターでのハンガリー・ラジオ交響楽団を率いての公演直後のことである。カール・オーフ「カルミナ・ブラーナ」の耽美な世界に引き込まれていた聴衆は、その世界から出ることを拒否するように拍手をしていた。

しかし、私の感想は、音楽の素晴らしさだけから来ているものではなかった。コダーイ・センターに到着し、会場に入ってホールの入口に向かおうとしていた私と妻は、同じように席へ向かおうとしていた多くの客に行く手を阻まれ、人の流れに身を任せていた。その時、丁度後ろを振り返った初老の品の良いハンガリー人の二人の婦人と目が合った。一人が私に向かって、「あなたは日本人ですか」と尋ねてきた。「そうです」と答えると、「私共は、彼（小林）をとても誇りに思っています」と言って微笑んだ。彼らも、音楽を聴き終えて、この満場の興奮した聴衆の一人になって夢中で拍手をしているのだろう。彼らは、日本人に向かって、ハンガリーの偉大な指揮者小林研一郎を、ハンガリー人として誇りに思っていると伝えたかったのだろうと思った。

ペーチの公演は、小林研一郎が1974年に第一回ハンガリー・テレビ国際指揮者コンクールで優勝して40周年に当たる今年、ハンガリーで行われる7回の記念コンサートのうちの一つであった。全てのコンサートを聴きに行けたわけではないが、私が行くことの出来たコンサートは、いずれの会場でも聴衆の熱い感激が伝わって来た。

ジュール市では、コンサートに招待してくれたジュール・フィルハーモニックの音楽監督ベルケシュさんが、隣の席で、「小林は、楽団員一人一人の能力を引き出してくれる」と説明してくれた。確かに、どの演奏会でも演奏終了直後の楽団員が満足そうに笑顔を抱いていた。止みならない聴衆の拍手の前に、小林研一郎が何度も登壇し、最後には楽団員に一緒に立って挨拶をするように促し、これで引き上げようとする時でも、楽団員が拍手をして小林研一郎を引き下がらせないことも何度か目撃した。小林研一郎の指揮の下で演奏することを喜び満足しているのである。

小林研一郎がこのように愛され、尊敬されているのはどうしてなのであろう。

もちろん、素晴らしい音楽の才能と指揮者として卓越していることが根底にあることは間違いない。しかし、それだけではないであろう。

私は、小林さんとハンガリーに来て初めてお目にかかった。感じたことは、奢らない態度、むしろ自分を常に謙虚な位置に置こうとされているたゆまない意識と繊細な感性であった。いずれも人が更に成長して、研ぎ澄まされていくために重要な資質と努力である。小林さんは私よりも大分人生の先輩であられる。それなのに、このみずみずしい感性と優しいながらの鋭さはなんだろう、と驚いたことを覚えている。謙虚さで人を受け入れた上で指導していくことは、指揮者として大勢の団員を統率していく上では大事なことのように思える。団員は、直ぐに小林さんが、如何に優れた指揮者であり、また同時に素晴らしい人間性を持った人であるかを感じるであろう。

このようにして40年。国立フィルハーモニーの音楽監督の10年を含め、ハンガリー国内の主要オーケストラを指揮してこられた。地方の主要都市も回り、ハンガリーの人々に心を打つ音楽を届けてこられた。音楽を大切にし、心の糧にしているハンガリーの人々が小林研一郎を愛するのは、自然なことのように思えてくる。

オルバーン首相が、2013年11月に日本を訪問し、安倍総理主催の晩餐会の席で挨拶した時に、招待されていた小林さんをはじめとする各界の代表を前にこう述べた。「我々、ハンガリーと日本の国民は幸運である。二つの国の間には、公式の政府を代表する大使に加えて、民間の優れた大使がいる」。小林さんにお会いし、そして、今回小林さんの演奏会に集まったハンガリーの人々を見て、オルバーン首相の言う通りだと思った。そして、私は、小林さんが、ハンガリーの人々が世界に誇りにしているハンガリーの指揮者だということを知って、小林研一郎が日本人であることを、一人の日本人として心から誇らしく思った。

（やまもと・ただみち
在ハンガリー日本国大使）

音楽教育研修とコバケンのゲネプロ

伊藤　直美

私が初めてハンガリーに来たのは、今から38年も前。ケチケメートにあるコダーイ音楽教育研究所で勉強するためで、その4年後に帰国して名古屋で音楽教育に携わりながら、ハンガリーの先生方を日本に招いて各地で講習会を企画してきました。

10年前に夫の故郷ケチケメートに引っ越してから、今度は日本の方たちにハンガリーへ来ていただき、本場のオペラやコンサートを事前に講義を受けてから鑑賞するという研修を、コダーイ音楽教育研究所時代の恩師ヘルボイ・イルディコ先生と共に企画しています。

今回は、修復されたリスト音楽院でのコンサートをぜひ味わってもらいたいと思い、コンサートを探しましたが、研修生の滞在期間中に大ホールで催されるコンサートは小林研一郎指揮MÁVオーケストラのみ。日本から来る方にわざわざ日本人指揮者のコンサートはどうかと躊躇しましたが、以前、リスト音楽院で聴いたコバケンによるチャイコフスキーの交響曲の巧みな曲作りが今も私の耳に残っており、音響がすばらしい大ホールで日本の方にコバケンを再認識してもらうのも悪くはないかと考えました。

ところが、さてチケットを買おうとしましたら、完売。「ハンガリー特有のコネに頼るしかないか」と、イルディコ先生や研修講師の1人テース・ガビさんにいろいろあたってもらいましたが、駄目でした。「ドナウの四季」で関連記事を読んだことを思い出し、面識もないのに盛田さんに突然メールいたしました。「チケットは完売だが、ゲネプロのチケットは都合できる」ということ。研修参加者はみな音楽関係なので、その幸運を喜び合いました。

コンサートの2日前にコダーイ「ガランタ舞曲」を、前日にベルリオーズ「幻想交響曲」を、イルディコ先生からソルフェージュも含んだ講義を受けました。全員、曲をしっかり把握して、当日、興味津々で大ホールへ。イルディコ先生がおっしゃっていたとおり、大曲であるベルリオーズ「幻想交響曲」から始まりました。

これまで、コチシュら何人かの指揮者のゲネプロを聴いたことがありますが、だいたいざっと流すだけで、途中で止めて直すことは多くありませんでした。ところがコバケンは違いました。作品に対する確固とした主張があり、途中何度も直しが入りました。そしてその要求を、ハンガリー語の単語と彼の気迫で通じさせていました。

往時の大指揮者フェレンチク・ヤーノシュはオーケストラに君臨し、厳しい人だったと聞いたことがあります。私が初めてハンガリーに住んでいた頃、やわらかい態度で接し団員を尊重するコバケンの姿勢が団員に好かれ、音楽関係ではない人たちも含めて、ハンガリー中がファンになってしまっているのを目の当たりにしました。現代ハンガリーを代表する音楽家でピアニストのコチシュ・ゾルターン（国立フィル音楽監督）は、類まれなすばらしい音楽性を持っているのですが、その暴君ぶりは有名で、リハーサル中、音を間違えた団員を罵倒し団員を対等な人間として扱わないという不評をしばしば耳にします。

それに比してコバケンは、要求を出す時は“Bocsánatすみません”と付け加え、うまく応えた時には“Köszönömありがとう”と感謝し、見学をしている私たちでさえも気持が和らぎました。その向かい合う姿勢に団員が魅力を感じ、心が寄り添うことでさらによい音楽が創造できていく、そういう場に居られたことを私たちは幸せに感じました。

「幻想交響曲」では、オーボエがステージ上と会場の外で応答するよう指示されています。前日の講義で、「会場の扉を開け、扉の外で吹くことが多い」とイルディコ先生は説明され、「小林氏がどのようにされるか興味があります」と楽しみにしていました。

コバケンは「そこじゃなくって、あちらに」と、2階席に向かって話しかけています。オーボエを2階席に配置したのです。ステージからのどかなオーボエに、2階席のオーボエの音が応える時、天から音が降ってくるような立体的な響きになりました。

また、管が3本で演奏される部分では、3本がそろって音を出さなかったので何度かやりなおしを要求、さらに「3本がピッタリそろうともっと大きい響きが生まれて聴衆がびっくりする。その効果を狙って」と、なぜそのような要求をしたかも説明。途端にすばらしい音響が響き、ベルリオーズの意図が再現されました。

感心したのはコダーイ「ガランタ舞曲」の最終和音への要求。最後の和音はふつう少し音を柔らかくして終わらせます。でもコバケンはフォルテで終わることを強調し、「弾きはじめを溜めておいて、最後に向かって音を出していく」と弦楽器に対し具体的に指示し、効果的な終わり方に持って行きました。一緒に聴いていたハンガリーの先生方も「なるほど」と、さかんにうなずかれていました。

（いとう・なおみ
コダーイ音楽教育研究所）

指揮棒の先に

坂井　圭子

指揮台でベートーヴェンが舞う「第九」を聴いた。オケメンバーが登場し、続いて合唱団が席に着くとマエストロ小林が舞台に現れた。指揮棒を構えるとオケだけでなく、客席の視線もその棒先に集まっているのが感じられた。

日本では年末によく演奏されるお馴染みの「第九」だが、交響曲にして合唱付というのは珍しい。ドイツの詩人シラーの詩「歓喜に寄す」にいたく感動し生まれたのが、この「第九」だという。第三楽章までがオーケストラによる演奏で、その後間髪を入れずに最終章合唱付第四楽章が始まる。「おお、友よ!このような調べではない!そんな調べより、もっと心地よく歌い始めよう、喜びに満ちて」。ティンパニの轟きに導かれて背筋がぞくっとしそうなバリトンソロの歌いだしである。そこに男声合唱が重なり「歓喜の歌」が始まる。

第一次世界大戦が終結となった年の暮れ、ヨーロッパの人々の新年への願いは平和であった。ライプツィヒにて12月31日の午後、100人の演奏家と300人の歌手によってベートーヴェンの「第九」は演奏され、その伝統は受け継がれることになった。そして、統一ドイツでも毎年の大晦日の午後、シラーやベートーヴェンが人類に望んだ平和を歌い上げるこの「第九」が演奏されることになったらしい。

私がソプラノソロを歌ったのも12月だった。日本で年末に「第九」が演奏されるようになった背景を調べてみた。戦後まもない頃、オーケストラの収入が少なく、楽団員が年末年始の生活に困る状況を改善するため、合唱団も含めて演奏に参加するメンバーが多く、しかも当時必ずお客が入ると言われた「第九」を現在のNHK交響楽団が年末に演奏するようになり、それが定例となったことが発端とされるそうだ。

日本では、年末の第九合唱人口が20万人とも言われている。日本全国あちらこちらで、老若男女が練習に励み、舞台の上で大規模なオーケストラと共演し、一糸乱れぬ演奏の達成感に喜びを感じるのだと思う。まさに、歓喜の歌である。実際歌った方はご存知かもしれないが、ベートーヴェンは合唱もソロパートもオーケストラの一部として作曲したのではないだろうかと思う。まるで弦楽器や管楽器を鳴り響かせるような音符の羅列を、つばを吐き飛ばすようなドイツ語の発音で歌うというのだから、声楽の面から見るといささか疑問符がつく。しかし、そんな難曲を乗り超えて歌ってみせようとする大合唱からは、みなが一つになれるその喜びに勝るものはないという思いを聴き取ることができる。頭の中をグルグル回り続けるようなあの印象深い旋律を腹の底から歌い上げるのは、大合唱の醍醐味なのだ。

ハンガリーデビュー40周年の今年、マエストロ小林は、リニューアルして輝きを増したリスト音楽院の大ホールで、リスト音楽院オケと合唱団を指揮された。幸い私はステージ近くの席で鑑賞していたため、炎のマエストロが、いや、ベートーヴェンという表現が相応しいと思うのだが、冒頭からオケとともにうなる声を聴いた。指揮棒の動きと共に息遣いを感じ、時にするどく向けられる眼差しや時に温かく微笑むマエストロにメンバーそれぞれがくいつくような表情を返している。間近で見たこのやりとりに、私は夢中になった。時折、すべての響きを会場の一番奥まで届けるかのように、マエストロは客席のほうへと遠く高く手を伸ばされる。その顔はとても柔和で、私自身も音楽を身体全体で感じることができた。

14歳の小林少年はサトーハチローの詩「藤棚の下に」をピアノ曲にした。この曲を20周年祝賀パーティで歌ったソプラノ歌手パスティ・ユーリアと30周年コンサートで歌った坂井圭子が、ドュエットで披露した（4月5日日本大使公邸レセプションにて）

ソリストと合唱が一斉に立つと、いよいよ「歓喜の歌」である。幾度となく歌ったことがあるので、一緒に心の中で歌ってしまう。恐らく、ご自分で歌も歌われるマエストロは、合唱団の心もわしづかみにされたのではないだろうか。高音での長いフレーズも途切れることなく、指揮棒に導かれるように歌いつながれていく。指揮台にあがったベートーヴェンは、髪を振り乱し、燕尾服を跳ね上げながら、指揮台の上で何度も飛び上がるかのように指揮棒を振っていた。ソリストのみで歌う最後のゆっくりした部分が終わると合唱とオケは速いテンポのフィナーレに突入した。心を一つにした演奏者全員が、歓喜に満ちた表情で力強く終焉を迎え、タクトが振り下りたその時である。なんと指揮棒の先の部分が宙を舞ったのである。舞台と客席の人々の高揚した思いを一心に受けて飛んでいったに違いないと私は思わずにはいられなかった。

（さかい・けいこ　日本人学校教諭）

ドナウの四季　2014年春季号　No.22

生まれて初めてのオーケストラ

木村　麻規子

4月3日の朝、私は自分の勤め先であるコルヴィンマーチャーシュ高校の生徒18名と、その引率教師2名のうちの一人としてリスト音楽院ホールにいました。その晩行われる小林研一郎氏のコンサートのゲネプロ（Generalprobe、全体リハーサル）を拝聴する機会を得たためです。ハンガリーでのコバケン人気は根強く、本公演のチケットは完売とのことで、午前10時開始ゲネプロでさえ観客席は満席で、改めて人気のほどを思い知りました。

クラシック音楽は好きですが、コンサートに足繁く通うような熱心なファンではなく音楽に詳しいともいえません。当然ながら本公演の前に行われる「全体リハーサル」を見ることが出来るのは初めてのことでした。全体リハーサルとは本番で演奏される曲をササッとおさらいし、本公演に備えて早々に終了するようなものかと想像していました。しかし、それは私が思っていたようなものではなく、緊張感に満ちた真剣勝負の場だったのです。

随所で演奏を止めては、納得がいく音が出るまで指示を与え続け、何度でも繰り返しを要求する指揮者と、それ倦むことなく要求に応えていくオーケストラ。小林氏のいつも聴衆に深い感動を与える芸術の裏にはこのような過程があったのかと、とても興味深く、普通のコンサート以上に夢中になり、時間が経つのを忘れてしまいました（本公演より長時間に渡っていたと思います）。それは楽譜にあるものをただ再現しようとするのではなく、楽譜には書かれていない世界の高みへ到達しようと試みている作業であるようにも見えました。

通常なら一般人には見ることが出来ないリハーサル風景を見るという幸運に浴した我が校の生徒は18名。そのうち半数は私の日本語クラスへ通ってくる生徒の中から、そして残りの半数は我が校生徒の中で音楽に関心が高い生徒を音楽の先生が選抜しました。我が校は音楽専門高校ではないので、学校行事としてプロの音楽を生で鑑賞するような機会はありません。数人の生徒に聞いてみたところ、小学校でもそのような機会に接したことがある生徒はいませんでした。我が校生徒は全員がブダペストか、そのすぐそばの町に住んでいる子供たちですが、18人の生徒のうち、これまでリスト音楽院ホールに来たことがあったのはただ1人だけ。富裕層の子弟が多い学校や芸術系専門校の学生なら話はまた別だろうと思いますが、我が校のようなハンガリーの平均的な家庭の子供たちの現状はこのようなものなのでしょう。

今回の18名の生徒のほとんどはオーケストラの生演奏を聴くことそのものが初めてでしたので、ゲネプロを拝聴する機会を得たことは本人たちにとってはもちろんのこと、学校にとっても、大きな出来事でした。

高校生世代の若者たちには「クラシック音楽=退屈」というイメージがありますが、後日ゲネプロを聴いた生徒に感想を求めてみたところ、「退屈だった」などと無礼なことを言う生徒は一人もいませんでした（ゲネプロは、熟練工の手で石が研磨され、宝石が最初の輝きを放つ瞬間を目撃しているようなものだったので、「退屈」なはずはありませんが…）。

当日、私の隣に座っていたのは趣味でサックスを吹いている生徒で、小林氏が金管楽器に指示していた場面では身を乗り出して特に真剣に見入っているのが分かりました。同様に、ヴァイオリンを弾く生徒はヴァイオリンが一番気になる部分だったそうで、とても刺激を受けたとのことです。また、日本語クラスの生徒数人は和太鼓の部分が気に入って、和太鼓の迫力に魅せられたようです。

音楽とはちょっと違った側面に注目していた生徒もいました。リハーサルでは小林氏が音に対して決して妥協を許さないため、同じ部分を何度も繰り返し演奏する場面が何度もありました。そんな時、氏は「うんうん、すごくイイ!」（褒める）、「でも、もっと!!」（絶対に妥協しない）、しかしそんな時、続いて必ず「ごめんね、ごめんね」…とオーケストラに謝っていて、生徒はそこから小林氏の人柄の良さを感じとっていたようです。それから、小林氏が外国人でありながらハンガリーでハンガリー人とともに仕事をしてきた人であったことに、何かを感じていた生徒もいました。

今回ゲネプロを拝聴することが出来たのは、私個人にとって興味深く思い出に残る体験となりました。またそれを生徒たちとともに体験することができ、日頃はあまり接点のない日本語クラス以外の生徒たちの意見も聞くことができたりして、さらに思い出深いものとなりました。貴重な体験をさせていただいたことを本当に感謝しています。

（きむら・まきこ
コルヴィンマーチャーシュ高校）

人生最高のコンサート

薄井　さやか

3月30日、ショプロンで行われたコバケンさんのコンサートは、間違いなく私の人生における最高のコンサートでした。といっても、私が行ったコンサートなど、全ジャンルをあわせても20回程度で、「最高の価値」やいかに、ではありますが、とにもかくにも間違いなく最高のコンサートでした。

幸運にも席は前から二列目。コバケンさんとオーケストラがまるで自分たちのために演奏しているような、ホームコンサート感覚。

一心不乱にタクトを振るコバケンさんをこんな間近で拝むことができるなんて、夢のよう。また、オーケストラメンバーがコバケンさんのタクトや振りを凝視しているのを目の当たりにし、指揮者の存在感、指揮者あってのオーケストラということを、思い知らされました。

曲が終わるたびに満面の笑みを浮かべるコバケンさんは、まるでオーケストラ全員のお父さんのよう。そしてメンバーたちは、「コバケンさんと力を合わせて素晴らしい演奏を!」と全身全霊を傾けている、私にはそのように感じました。

コンサートで鳥肌が立ち、涙が出そうになったのはこれが初めて。音楽は心の栄養とはよく言ったもので、コンサート後は日ごろのストレスや疲れ、眠気まで吹っ飛び、元気ハツラツになりました。

コンサート後、なんとコバケンさんご夫妻と夕食をご一緒させていただくことになりました。ハンガリー在住の日本人でショプロンにコンサートを聴きに行ったというだけで、ご一緒した皆さんと違い、コバケンさんのコンサートをはまだ二度目という素人の私がこんな幸せな場面に居合わせられるなんて、運を使い果たした気分です。

コバケンさん、とてもお疲れでしたでしょうに、私たち全員に声をかけてくださり、プログラムにサインまでしてくださり、本当に感謝感激。また、コバケンさんご夫妻の仲むつまじい様子がとても素敵で、天皇皇后両陛下、自分の両親に並ぶ理想の夫婦ベストスリーに勝手にランクインさせていただきました。

素敵なコンサートを聴かせてくださったコバケンさん、諸処ご手配くださった盛田先生、誘ってくださった小松さん、一緒に旅行してくださった皆さん、本当にありがとうございました。

また来年も素敵なコンサートに聴けますように。

(うすい・さやか)

コバケンさんの思い出

小村　陽子

私が初めてコバケンさんのコンサートを聴きに行ったのは、いつだったろうかと思い起こすと、一度目のハンガリー赴任を終えた10年ほど前の2005年のこと、それも日本でした。ハンガリーでは、コバケンさんのチケットを買いに行っても、動くのが遅かったのか、いつも完売だったからです。2008年から再びハンガリー赴任となり、コバケンさんのコンサートに出かける機会が増えました。そして、今回、コバケンさんのハンガリーデビュー40周年コンサートを聴きに行くことができて、つくづく良かったなと思っています。

3月14日から始まったコンサートを追っかけました。その中での、一番想い出深い出来事を書かせていただくことにしました。

3月30日のショプロンでのコンサートの後、コバケンさんご夫妻を囲んでの夕食会を設けていただき、私も、ご一緒させていただきました。何と、私の正面に、コバケンさんが座られて、ドキドキ。きっと、食事も喉を通らないし、しゃべれない・・・と、思っていましたが、コバケンさんから、「皆さん、自己紹介を」と、切り出され、順番に自己紹介が始まりました。私の番になった時に、「あ、確か大福の・・・、お名前は、ようこさん」と、奥様が、言って下さいました。大感激です。2011年11月、ブダペストのイタリア文化会館のコンサートで差し入れした大福を覚えていただいていました。食べ物の威力大です(奥様の名前も、「ようこ」です)。

自己紹介の後は、緊張も少しほぐれたので、コバケンさんのお心遣いに感謝です。

ビールで乾杯!喉を通らないかもと思っていた料理も、しっかりといただきました。会話が弾む中で、ご夫婦の仲が、とてもいいなぁと、思う場面がいくつもありました。詳細は、割愛させていただきますが、しっかりとコバケンさんを支えていらっしゃる奥様、その奥様に、優しい言葉をかけられているコバケンさん。お二人とも、とても気さくに話しかけて下さったので、楽しい食事会となりました。

何でも話していいと言われたので、初めてコバケンさんのコンサートを聴きに行ったコンサートのアンコールの最後に、コバケンさんが「アメイジング・グレイス」をピアノで弾いて下さったのが、とても心にしみて、感動したことをお伝えしました。

11時すぎまで楽しい食事会が続きましたが、コバケンさん達は翌日のコンサートのためにジュールまで移動される時間となり、食事会はお開きとなりました。

私は、またいつか、コバケンさんのピアノ演奏が聴ける日を夢見ながら、皆さんとレストランを後にしました。

(こむら・ようこ)

ジュール・コンサートの余韻

森田　友子

私はハンガリー人生を日本語教師として始めたのだが、「小林研一郎」は、どの生徒も知っている人名であった。でも、実はもしかしてこれは全国民が知っているのではないかと感づき始めたのはそれからすぐのこと。ハンガリー人と知り合って、日本に関係する単語・知識を披露して下さる中に、必ずと言っていいほど「スシ」「ゲイシャ」と並んで「コバヤシ・ケニチロ」が入ってくるのである。どんな方なのであろうかと調べてみると、ちょうど私の生まれた年にブダペスト国際指揮者コンクール優勝とあった。主人に聞くと、小学生だった頃にテレビで見て、顔に感情の全てが現れ、全神経を投じて指揮を振っていた姿を覚えている、と言う。まだ一つしかチャンネルがない時代で、まさに国中のハンガリー人が注目していた放送だったそうだ。

言わずもがな音楽の染み込んでいる国ハンガリーでのことだから、この人気は一時的なものではなく、40年経った昨今までも健在だった。チケット手配は、いざとなったら知人のジュール・オーケストラ関係者にお願いできるから大丈夫だろうとタカをくくっていたが、秋の初旬に問い合わせした時点では既に手遅れで、半年以上先の3月末のチケットが完売という状態だった。このコンサートには私たち夫婦だけでなく、日頃お世話になっているジュール在住の主人の親戚が切望していただけに、すぐに断念するわけにいかず、それからも方々を当たってみた。親戚は親戚で、勤め先の病院の関係者から個人歯科医院に通う患者さんまで、全ての伝手を頼って探してみたようだが、皆から、「入手は不可能だろう」と言われたそうだ。なぜなら、このコンサートは劇場のセット券のトッププログラムだったようで、セット券には販売の「おとり」にできる人気の高いプログラムが必ず入る。オーケストラもこうやって、チケットを販売しているということだ。ありとあらゆる方法で頑張ったが、年を越してもチケットを手に入れることができなかった。それでも諦め切れず、いよいよ最後の手段で、編集長の盛田さんに泣きつき、神頼みで授かったチケットだった。

コンサート当日は山本大使もご列席された。感動としか他に言いようのないコンサートを鑑賞することができたのだが、ベートーベンにサンドイッチされたコダーイの「ガランタ舞曲」は、私にはとても不思議に印象の残る曲で、帰路ヴェスプレームまでのドライブ中もこの曲のメロディーが頭から離れなかった。聞いたことのない曲であったと言ってしまえばそれまでだが、ベートーベン2曲も耳にしたことあるかどうか定かでないのにここまで強いひっかかりはなかったので、自分にとって何か特別だったのだろうと思った。帰宅後すぐ、コンサートを聴かせて頂いたばかりなのに失礼とは思いながらも、早速インターネットでこの曲を探して聴いてみた。こどもの頃から父に、絵画展から帰ってすぐには印刷の絵を見ない方がいい、本物の色を忘れてしまうから、と言われていたことを思い出しながら、少し罪悪感を持って実行したのだが、これは音楽には当てはまらなかった。本物を聴かせてもらえたおかげで、スマートTVからの音響が、この日のコンサートの再現のような深い音に聞こえてきた。映画を見た後で原作本を読むような感じに似ていた。娘が民族ダンスを習っているので普段もハンガリーの民族音楽をよく聞いているからか、この曲にはすっかりはまってしまい、半月たった今日でも時々余韻に浸っている。

最初から最後まで譜面なし、一流のジュール・フィルハーモニー管弦楽団を熱く指揮され、お疲れの様子など微塵も見せず、挨拶もユーモアたっぷりに締められた小林先生の音楽が素晴らしかったのはもちろんのことだが、私は別の意味でも感慨深かった。ハンガリーに住んでこのかた、ここのチームプレーに何度か立ち会ったが、個々人の実力があっても集団行動には難があるハンガリーの方たちを、あのようにまとめられる人物にはこれまでお目にかかったことがないように思える。

ジュール・コンサートから2週間後、おもしろい縁で、もう一つおまけの余韻を楽しむこととなった。なんとショプロンのコンサートまで駆け付けた「おっかけ御三方」とご一緒する機会に恵まれたのだ。小林先生のことで話が盛り上がったのは言うまでもない。

来年はヴェスプレームでも小林コンサートが開催されるとのことだから、もう今から楽しみにしている。小林先生の力の源だと伺った新鮮な生たまごを準備してお待ちしたいと思っている。

(もりた・ともこ　ヴェスプレーム在住)

清帰途太鼓の歴史的共演

高久　圭二郎

1993年にハンガリーに留学してから何度となくハンガリー人から出身を聞かれたが、何回かに一度は「日本人か！じゃあコバヤシ・ケンイチロウを知ってるか」と言われる。とくに年配のハンガリー人に多い。もちろん現在の若い世代も（少なくとも20代くらいまでは）、小林研一郎の名を聞けば、普段の聴いている音楽がクラシックでなくとも、「ああ、あの有名な日本人指揮者の！」と言うだろう。

留学生時代は演奏会の後に楽屋まで挨拶に訪れて、お近づきになり、当時のハンガリー国立交響楽団（当時の略称「ÁHZ」）の練習場へも出入りして、小林先生のリハーサル風景を打楽器パートの勉強も兼ねて、見学に行ったものだ。

リハーサルで音楽が仕上がっていくを見て、本番の演奏を聴くというのは、とても面白い、単なる聴衆としての立場ならあり得ないほど贅沢な事だ。国立響のリハーサルへは、小林先生だけではなく、他の著名な指揮者や、協奏曲のソリスト目当てで行くこともあった（他にも師匠ラーツ・ゾルターンがブダペスト祝祭管弦楽団メンバーだったころはそちらのリハーサルも見学に行ったものだ）。

小林先生の指揮する姿には、足元から指揮棒の先端まで気合いが入って、かつ柔軟なバネの様な動きがあり、オーケストラのメンバー各人も集中力がいつもより2倍、3倍増したかの様に反応する。さらに小林先生には豊かに響いて遠くまで届く、オペラ歌手並みの声という武器もある。その声で、音楽の進行に従って次々とオーケストラへの指示が届く。いちいち演奏を止めていう必要がない。その指示は指揮の予動（次の動きを「あらかじめ」見せる動作）の如く良いタイミングで入り、オーケストラのメンバーもその指示に「乗って」演奏に集中することが出来る様に見える。それでもやはり、こだわりのある部分では演奏を止めて、しっかりと、妥協することなく、自身の表現を伝えて、その音、演奏が得られるまで諦めない。

今でも情景が浮かぶ思い出がある。それはリムスキー・コルサコフの名曲「シェヘラザード」を国立響で演奏したときだ。リハーサルは第二楽章に入り、有名な主題をファゴットやコーラングレ（イングリッシュ・ホルン）が奏でる。メンバーがしっかりと演奏しているこの旋律の表現に、納得のいかないマエストロ。指揮棒どころか頭、上体、腰などの全身の動きを駆使して伝え、歌い伝えして、ようやくファゴットにOKがでた。しかしコーラングレに手間取り、時間に限りがあるため全体のリハーサルに戻ったが、休憩時間を返上してコーラングレ奏者とマンツーマンでリハーサルを継続した。

オーケストラのいつもの演奏、ルーチンワークの演奏を決して許さずに小林節を求めるが、それはオーケストラの集中力、やる気を引き出すもので、オーケストラのメンバーには嫌な顔などなく、むしろ嬉しそうである。小林先生以外にももちろん著名な指揮者がハンガリーのオーケストラで指揮をとり、オーケストラも良い仕事をするのであるが、小林研一郎が指揮台に立ったときの雰囲気は何か一味違っている。ハンガリー音楽家にとって特別な、崇拝すべき存在のサー・ショルティやヴィーグ・シャーンドルが指揮をしたときのオーケストラ団員各人の雰囲気と演奏はもちろんスペシャルだったけれど、コバヤシ・ケンイチロウと対するときは、また異なるスペシャルな空間がそこにあるのだ。

曲目がなかなか思い出せなかったが、曲の冒頭、ファゴット・ソロで始まるという記憶を辿ってみると、ストラヴィンスキー「春の祭典」だったと思う。リハーサルで、コバヤシの解釈として、こう演奏して欲しいと注文をつけ、小林先生が納得いってやっとその先に進むことが出来たという事があった。そのコンサート本番のリスト音楽院大ホール。そのリハーサルに居合わせた私もすぐに「あ！」っと気付いたが、手直しされる前の、その奏者にとっての「いつもの」演奏になっていた。

そんな場面には生まれて初めて遭遇したが、小林先生は演奏を止めた。そしてほんの数秒か10秒ほどだったかの沈黙のあと、まず観客に演奏を止めた謝罪をし、決して奏者を責めたりはしなかったが「コバヤシの音楽ではなかった」とストレートに理由を説明した。そして演奏は再開されたが、その時はリハーサルでマエストロが要求した音楽になっていた。

そしてこの「春の祭典」は、指揮者・オーケストラ・聴衆が一体となった、奇跡の演奏となり、終了した瞬間からの観客の熱狂的な拍手喝采はホールを揺るがすほどであった。歴史あるリスト音楽院大ホールでは、数多くの伝説的な演奏会があるが、マエストロ・ケンイチロウ・コバヤシの演奏会

もそんなレジェンドに数えられるだろう。

小林研一郎40周年の演奏会シリーズは、大改装工事を一応終えて再開した音楽院大ホールをはじめとして、ハンガリー各地で開催された。ハンガリーの第一回国際指揮者コンクールで優勝した年を、真の指揮者活動歴元年とするマエストロは、それを自著にも書いているし、式典の挨拶でも述べているが、「風はハンガリーから来た」と表現している。

そんな小林先生の40周年記念演奏会シリーズ最終回の2014年4月3日、MÁV交響楽団との演奏会のアンコールは、小林研一郎作曲「パッサカリア」から、「夏祭り」であった。そしてその客演として、演奏会シリーズを企画した盛田氏からの依頼で清帰途太鼓として演奏する機会に恵まれた。

リハーサルでは小林先生の考え、こう演奏して欲しいという言葉を頂けたので、曲と合わせての具体的なイメージがようやく出来上がった。曲中の短い時間なので、ダーヴィッドと私のパートが同じリズムならない様に、そして次々とリズムを変化させていく様にというのがリハーサルでのマエストロの指示であり、当日のゲネプロ（メイン・リハーサル）ではさらに、静かに始めて徐々に盛り上げていく様にと指示を受けた。

本番では演目のメインであるベルリオーズ「幻想交響曲」の熱演の後、オーケストラからの祝辞とプレゼントがあり、小林先生からの返礼スピーチがあり、その後にアンコールの演奏となった。現在正規メンバー8名、研修生2名の中からリーダーのダーヴィッドと私だけの参加であったが、結成14年となる清帰途太鼓にとって、マエストロ小林研一郎40周年コンサートという記念すべきイベントに参加出来た事は、団の結成以来の、格別なる特筆すべき事であった。

アンコールだけの参加故、MÁV交響楽団のコンサートプログラムなどの公式記録には載っていないので、本稿にて記録したいと思う。私個人的には、山本大使主催レセプションにお招き頂いてマエストロと記念撮影が出来たので、それをお宝画像としてとっておこう。

（たかく・けいじろう
清帰途太鼓音楽監督）

和太鼓グループ「清帰途太鼓」
その名の由来と活動

帰途太鼓は、ハンガリー人の詩人で作家のパウリニ・タマーシュにより2000年3月20日に、ハンガリーおよび中欧で最初に結成された和太鼓グループです。

清帰途太鼓のチーム名は、パウリニ・タマーシュがハンガリー語と日本語両方で意味のある言葉になる様に付けられました。元は厳格な教育、自己鍛錬などを意味するハンガリー語の「kiokító」（キオキートー）であり、結成当時メンバーであった日本語学科学生により「清らかな音への回帰」として、「清帰途」の漢字があてられました。

年に1、2回の定期コンサートを本拠地ブダペストで開催するかたわら、ハンガリー各地のイベントに招聘されて演奏しています。また企業のパーティー、式典などにも音楽事務所、イベント企画会社を通じて頻繁に出演、これまでに日系企業ではマジャール・スズキ、サンヨー、ソニー、デンソー、ブリヂストン、タカタなど、韓国企業ではサムソン電子やヒュンダイ自動車販売店などのイベントに出演してきました。

2005年8月には日本EU市民交流年で来洪した「ヒダじんぼ」のミレナーリシュ公演に国際交流基金の依頼でゲスト出演をし、2007年8月20日の建国記念日ではハンガリー政府主催の「音楽船」に乗船演奏しました。さらに2009年の日本ハンガリー交流年では「ブダペストの春」にてターリア劇場とヴルシュマルティ広場特設舞台に出演し、9月5日に民族学博物館にて開催された「日本文化の日」ではメインイベントとして清帰途太鼓コンサートが開催されました。

ハンガリー日本友好協会、ハンガリー盆栽協会、ハンガリー剣道連盟と恒常的な協力関係にあり、ハンガリーにおける日本文化の紹介に一役買っています。

また在ハンガリー日本大使館からの依頼でたびたび日本文化紹介イベントに出演、また在クロアチア日本大使館を通じて4度のザグレブ出張公演、在スロヴァキア日本大使館の依頼で1度、ブラチスラヴァの日本文化の日に出演しました。

ハンガリーの著名なピアニスト、カーラーシ・シルヴィア、ハヴァシ・バラージュとは密接な協力関係にあり、これまでに彼らのリスト音楽院大ホール、国立バルトーク・コンサートホール、アリーナでの演奏会に定期的に出演しています。そしてハヴァシ・バラージュの企画では、ブカレスト演奏旅行にも2回参加しています。

清帰途太鼓の主な演目：金山陣太鼓、龍舞、祭り、天馬、végpillanat（最期の瞬間）、練習、三宅、屋台囃子（清帰途バージョン）、えんやーとっとー、szív　tánca（心の踊り）、４分の７拍子、Tavaszi szél、Köszönt（祝福）、関ヶ原、組曲「StimmTt」、組曲「月読太鼓」、龍神太鼓

連絡先: kiyokito@taiko.hu; laardavid@taiko.hu; laardavidd@gmail.com（ハンガリー語）keijike@gmail.com（日本語／英語）
Web:http://taiko.hu/
Facebook:https://www.facebook.com/kiyokito

編集部よりのお知らせ

「ドナウの四季」のHPが完成しました。これまで掲載されたすべての原稿を読むことができます。

http://www.danube4seasons.com　皆様の原稿をお待ちしています。エッセイ、ハンガリー履歴書、自己紹介、サークル紹介などの記事をお寄せください。提出いただいた原稿は、紙面統一の編集のために修正することがあります。修正した原稿は執筆者の校正をお願いしています。

原稿は電子ファイルで、morita.magyar@gmail.comへお送りください。Word文書あるいは一太郎文書でお願いします。EXCEL形式での提出はお控えください。写真および図形は別ファイルで送付ください。

マエストロとの夢のレコーディング

金子　三勇士

昨年2月、CD制作でお世話になっているレコード会社社長より一本の電話が入りました。「マエストロ小林研一郎指揮、ロンドン・フィルハーモニー交響楽団とチャイコフスキー・ピアノ協奏曲のレコーディングに挑マエストロ・コチシュとの夢の共演に向けて戦してみない?」との内容でした。お話を伺うと、マエストロとロンドン・フィルハーモニーの交響曲レコーディングの最後のセッションにて、マエストロのご好意により、協奏曲を収録させていただけるとのことでした。突然のお話で驚きを隠せませんでしたが、尊敬するマエストロと一流のオーケストラとの共演は夢のようで、飛び上がるほどの嬉しさでした。

レコーディングは2月28日から3月2日の間、ビートルズでおなじみのロンドン・アビーロードスタジオにて行われました。
初日、空港からスタジオに直行し、到着後すぐにリハーサルとピアノのチェックに入りました。そこで一つ大きな問題に直面することになりました。

スタジオのピアノが少々古いと聞いてはいましまが、実際触れてみた楽器の状態が予想以上に悪く、マエストロをはじめ、プロデュースやディレクションの方々との話し合いの結果、初日のレコーディングは中止、翌日までになんとか別のピアノをレンタルすることに決まりました。

自分の楽器を持ち歩く事の出来ないピアニストは楽器を選んではならないというのが、この世界の掟です。僕自身、たとえどんな楽器であろうと自分ができる最高の演奏をするべきだと考えてきました。しかし、マエストロ小林、ロンドン・フィルハーモニー、アビーロードスタジオ、そして一流エンジニアによる最高のレコーディングには、流石に現存したピアノはふさわしくないと判断せざるを得ませんでした。翌日、スタインウェイ社のサポートのおかげでなんとか無事新しい楽器がスタジオに持ち込まれました。

スケジュールが大きく変更になってしまいリハーサル時間もなく、そのまま本番レコーディングがはじまりました。チャイコフスキー・ピアノ協奏曲第一番。ロンドン・フィルの音はダイナミックかつ繊細で、心に響く素晴らしいものでした。マエストロのエネルギッシュな指揮に負けない位、団員一人一人が凄い集中力で演奏をはじめました。スタジオ内には今までに感じたことのない、なにか特別な空気が流れていました。その心地よい世界にまるで包み込まれるかのように、自分はただピアノに向かって一音一音弾いていました。

マエストロとはこれまでも何度かチャイコフスキーの協奏曲でご一緒させていただく機会をいただいていましたが、今回のレコーディングではなにか魔法をかけてくださったのでしょうか、周りも、自分もある種の無の精神状態に引き込まれていくような、とても不思議な感覚でした。その時の事を思い出そうとしても、なぜかほとんど記憶が残っていません。

全体的にミスや問題点が少なく、演奏とレコーディングはあっというまに終わりました。マエストロの情熱、そして目に見えない特別な力。奏者全員が一体となるとはこういう事なのかと思わせてくれました。一生忘れることの出来ない素晴らしい体験になりました。

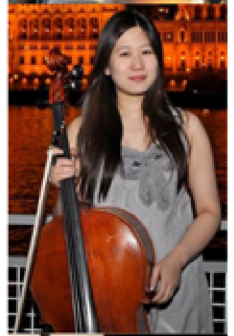
その後CDはオクタヴィアレコードの高音質レーベル、エクストン・ラボラトリー・ゴールドラインより発売されました。ロンドンでのおもいでのレコーディング、皆様にも是非お聴きいただきたいです。

今年の6月、久しぶりにハンガリー国立フィルハーモニー管弦楽団が来日します。今回ソリストの一人として、東京サントリーホール等の公演にてリストのピアノ協奏曲第1番を演奏させていただきます。プログラムの指揮者はマエストロ・コチシュ・ゾルターン。皆様もご存知の通り、もともとはハンガリーを代表する素晴らしいピアニストです。実は幼い頃、僕はハンガリーの祖母からプレゼントされたコチシュ演奏バルトーク「子供のために」のCDに感激し、その影響を受けてピアニストを目指すようになりました。そんな憧れのマエストロとの夢の初共演、今から本当に楽しみです。日本の舞台とはいえ、自分はおそらく無意識にもハンガリー人となり、ドラマチックで熱いリストが弾けるような気がします。その頃日本いらっしゃる方々は、こちらも是非お見逃し無く。

（かねこ・みゆじ　ピアニスト）

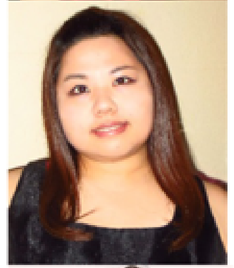
♬ リスト音楽院ディプロマコンサート情報

■4月17日(木) 16：00開演　旧リスト音楽院　Regi Zeneakademia
(1064 Budapest, VI. kerület, Vörösmarty u. 35)
小森　夕理（クラリネット）
プログラム：アーノルド：ソナチナ
シュターミッツ：クラリネット協奏曲
ヴェイネル：ハンガリーダンス
ブラームス：クラリネット五重奏曲　op.115



■5月8日(木) 15:00開演 リスト音楽院 大ホール
白井　彩（チェロ）
プログラム: J.S.バッハ: ガンバ ソナタ 二長調 BWV.1028
G.リゲティ: チェロ ソロソナタ
Z.コダーイ: ヴァイオリンとチェロのためのソナタ Op.7
チャイコフスキー: ロココの主題による変奏曲Op.33
共演者：サバディ・ヴィルモシュ（ヴァイオリン）
リスト音楽院有志オーケストラ

■5月13日(火) 19：00開演 リスト音楽院 ショルティホール(小ホール)
森　由香里（ピアノ）
プログラム：L.v.Beethoven: Piano Sonata No.12 As-dur Op.26
Franz Schubert: Impromptus Op.90-2, 3
Béla Bartók: 15 Hungarian Peasant Songs Sz.71
Chopin: Nocturne Op9 No.1, 2, 3
Dutilleux: Sonate pour piano



■5月19日(月) 19：00開演 リスト音楽院 ショルティホール(小ホール)
渋谷 有佐（ピアノ）
プログラム: J.S.バッハ：パルティータ 第6番 ホ短調 BWV 830
F.シューベルト：さすらい人幻想曲 ハ長調 Op.15
J.ブラームス：ピアノソナタ 第3番 へ短調 Op.5

■5月26日(月) 19:00開演　リスト音楽院 ショルティホール(小ホール)
矢嶋　杏里沙（ピアノ）
プログラム:スカルラッティ：ピアノソナタ K96,L465ほか
シューベルト：ピアノソナタ op.120 D664
メンデルスゾーン：ファンタジー op.28
リスト：超絶技巧練習曲より 夕べの調べ
プロコフィエフ：ロミオとジュリエット

■5月28日(水) 19:00開演 リスト音楽院 ショルティホール(小ホール)
宮堀 諒美（ピアノ）
プログラム：J.S.バッハ：イギリス組曲 第1番 イ長調　BWV806
L.v.ベートーヴェン：ピアノソナタ 第23番 《熱情》Op.57
F.メンデルスゾーン：ピアノ協奏曲 第1番 ト短調Op.25
共演：アニマ室内管弦楽団(Anima musicae kamarazenekar)

留学生自己紹介

たくさんの出会いに支えられて

ブダペストコルビヌス大学経済学部
榎本　瑞季

私はブダペストにあるコルビヌス大学で交換留学生として経済学を学んでいます。コルビヌス大学は、国内有数の名門大学として知られており、主に経済学に関して特化しています。ブダペストの中心部に位置し、中央市場とドナウ川に挟まれたコルビヌス大学を初めて自分の目で見たのは、昨年の夏、ハンガリーの地に降り立ったその日でした。綺麗にライトアップされ、ヨーロッパの雰囲気が溢れ出るその外観を見て、「私は1年間この大学で勉強することができるのか」と思うと、心が躍ったのを今でも覚えています。

そんな私ですが、正直なところ、コルビヌス大学への留学が予てからの希望だったわけではありません。私が留学を意識し始めたのは、高校生の時でした。たまたま見たドキュメンタリー番組で、国連難民高等弁務官事務所に務める女性の存在を知ったからです。たった一人で途上国の村を取り仕切り、その地の経済発展に貢献する姿を見て、深く感銘を受けました。自分もこの女性のようなかっこいい人間になり、世界中の人と関わる仕事がしたいと思うようになりました。そのためにまず必要となるのは英語です。元々英語が好きだったというのもあり、いつかは英語圏に留学してみたいと思っていました。

大学では、よりたくさんの時間英語に触れられ、同時に世界の現状を知れるように経済学部国際コースを専攻しました。大学3年の春、自分の将来を真剣に考えてみたとき、今留学しないと一生後悔すると思いました。やはりどうしても英語を話せるようになりたかったのです。そこからが猛勉強でした。それでも英語力は足らず、英語圏への留学は諦めざるを得ませんでした。そんな時、大変お世話になっている大学の先生から勧められたのがコルビヌス大学でした。東欧経済を勉強していたこともあり、チャレンジしてみた結果、合格し、ハンガリーへの留学が決まりました。

コルビヌス大学には、海外からの留学生がたくさんいます。留学生は英語での授業を履修しますが、ハンガリー人は基本的にハンガリー語での授業を履修しています。もちろん私は英語で授業を受けています。その為、ハンガリー人と知り合える機会は多くありません。それでも、友達になったハンガリー人はみんなとても優しく、日常生活で何かトラブルが発生すると必ず助けてくれます。コルビヌス大学に通う留学生の英語のレベルは非常に高く、ついていくので精一杯です。

初めは、授業で先生が言っていることの半分も分からず、毎回家に持ち帰り、理解できなかったことについて調べながら勉強し直していました。その為、レポートや試験勉強にかかる時間は他の学生の倍以上だったと思います。それでもなお、自分の英語力が成長しているようには思えませんでした。ハンガリーでの留学生活を始めて早くも半年が経とうとしています。これまでの5ヶ月半を振り返ると、早かったような長かったような自分でも不思議な感覚です。異国の地で初めての一人暮らし、英語での授業、英語での友達付き合い、膨大な量の宿題、全く分からないハンガリー語、全てが新鮮な一方、常に何かに追われ、焦りと不安を感じながらいつの間にか前期が終わろうとしていました。冬休みには、勉強から完全に離れてヨーロッパ周辺諸国を3週間に渡り旅行してきました。この旅行は、私にとってとても良いリフレッシュ期間だったと思います。ハンガリーとはまた違ったヨーロッパの雰囲気が味わえ、様々な人と出会い、人の優しさも醜さも知りました。

一口にヨーロッパと言っても、国によって風景も人も違います。3週間経てブダペストに戻ってきた時、なんだかホームタウンに戻ったように感じました。それまで、ブダペストでの生活には慣れていたつもりではいたものの、なんとなく落ち着かない毎日を送っていたのに、一度出て再び戻ってきたとき、なんだかとても心が落ち着いたのです。「ここが今の私の居場所だ」そう思いました。そう思えるようになってから、生活面でも心境面でも私の留学生活は劇的に変化したと思います。

自分が変わると、そこには今まで見えなかったたくさんの出会いがありました。冬休みの1ヶ月間、私はたくさんの人との出会いに恵まれ、たくさんの人と話をすることが出来ました。そしてそれらの出会いを経て、自分の殻を少し破れた気がします。その中で、まだまだ成長とは言えないですが、自分の英語力の伸びを感じることも出来ました。それにより、様々な面で以前よりも自分に自信が持てるようになったのです。「もっとたくさんの人と出会い、もっとたくさんの人と話をしてみたい」それが今の私の原動力です。その為に、自分の語学力を弊害にしたくありません。自分がもっと英語を話せるようになったら、人との会話をもっと楽しめるようになると思います。だから、怖がらずに今出来ることを精一杯頑張ろうと思います。

（えのもと・みずき）

留学生自己紹介

三度目のハンガリー

リスト音楽院ピアノ科大学院2年
森　由香里

2011年9月4日。私にとって期待と不安でいっぱい三度目のハンガリー。一度目は先生探し。二度目は家探し。

大学の先輩にハンガリーでの留学の話を聞いたことから始まりました。先輩が師事していた先生に習ってみたいと思い、2010年の11月にハンガリーへ行きました。その時に、先輩が師事していた先生と、今習っているファルヴァイ・シャンドール先生からレッスンを受けました。今はファルヴァイ先生と、もう一人別の先生についています。翌年2月に、札幌のリスト音楽院セミナーで、パートタイム生の試験を受けました。こうして、最初の1年はパートタイム生として在籍して、次の年にマスターコースへ受験して、現在はマスター2年目です。完全帰国まではあと4ヶ月を切りました。

私は一人暮らしが初めてで、最初は生活リズムを作るのがとても大変でした。練習時間も日本とは違って限られているし、友達もすぐにはできなかったので、一人でいる時間をたくさん過ごしました。家にこもりがちになると、自分を見つめる時間が増えて、閉塞感に陥ったりすることもありましたが、今はリフレッシュ方法を見つけることができて、自分の心と対話したり、友達とご飯を食べに行ったり、豊かな自然のある公園へ行ったり、街並みを眺めたりしてストレスを発散させています。

ハンガリーへ留学して、自分のことをよく考えるようになりました。自分の演奏スタイル、自分のしたいこと、自分ってなんだろう、と。自分がすべて決めることなので明確な答えは出ませんが、自分と真剣に向き合えたことはとても大切なことだと思っています。これまでのような他人任せでなく、「自分主体で生きるって覚悟と勇気がいるんだなぁ」ということを学びました。どういう曲を弾きたいのか、どういう演奏をしたいのか、もっと簡単なことで言えば、何が食べたいのか、なにがしたいのか。

先生方は私のしたいようにしていいよと言ってくださいます。「あなたが決めるのだよ」と最初に言われた時に私はとても戸惑いました。それまで、すべてを先生に決めてもらっていたので、自分で決めるってどうしたらいいのだろうと、やり方が全くわかりませんでした。今は自由な選択権を与えてもらっていることをとても嬉しく思います。私の意思を尊重していただいて、先生からのアドヴァイスを頂く。受身だったレッスンも能動的になることができました。先生方とのレッスンでは、どの曲でも楽しく弾くことが大切で、和音の響きを大事にしなさいというアドヴァイスをもらいます。もちろん、テクニックも教えて頂きますが、耳でよく聴くことがいかに大事かということを常にレッスンで考えさせられます。「この和音の響きが素敵だよね」や「この旋律は本当に美しい」と先生がおっしゃる時の表情が無邪気で、

嬉しい気持ちになります。こうやって先生方から学んだことは私の宝物です。

ところで、最初の頃は泣いてばかりいました。英語も通じないし、ハンガリー語もできず、インターネットを繋ぐのも苦労したし、スーパーへ行っても野菜や果物の量り売りのやり方がわからず買えないこともありました。怒りをぶつけられて泣いたこともありました。当初は日本との違いにとても悩まされましたが、今となっては、そういうふうに自由に生きられるって素敵だなと思います。レジにいようが何をしていようが好きな時に話したり、好きな時に飲み物を飲んだり、好きな時に携帯電話で話す。逆に、日本の人工的な笑顔で接客するのを不自然に感じてしまうようになってしまいました。

ハンガリーに留学したことで、日本人特有の真面目さや几帳面さを守って固く生きなくても、もっと柔らかく生きることも大事なのかなぁと思いました。また、練習の苦情で、私はこの2年半の間に2度も引越しをしています。もちろん、学校でも練習できるのですが、こういう時には日本での練習環境の良さをとてもありがたく思いました。楽器の練習ができるという物件でも、隣人たちが寛容でない限り、心地よく練習をすることは難しいんだなぁと思いました。いろいろなところでハンガリーと日本の違いにぶち当たりましたが、今はそれを「そう、これがハンガリーだよね」と柔軟に受け止められることが多くなりました。

この2年半の間、ハンガリーにいて私はヨーロッパ各地をたくさん旅行することができました。旅行はとてもいい経験になったと思います。それぞれの国で雰囲気も違うし、歴代の音楽家もたくさん旅行をしているので、その気分に浸ったりすることもありました。それもまた留学の醍醐味の一つだと思います。

ハンガリーに留学したことで私の世界は広がりました。今までどれだけ小さい世界で生きてきたんだろうと思います。たくさん泣いて、たくさん悩んで、たくさん怒って、たくさん絶望して、たくさん笑って、たくさんの思い出と感情を味あわせてくれたハンガリー。あと4ヶ月弱、存分に楽しみたいと思います。

（もり・ゆかり）

留学生自己紹介

自分と向き合うことの大切

リスト音楽院大学院ピアノ科2年
矢嶋　杏里沙

ハンガリーに留学してもうすぐ3年が経とうとしています。私にとって海外に移住することや、一人で生活をしていくこと、何もかもが初めての経験でした。いったい私は一人になるとどんな風に生活していけるのだろうという思いはありましたが、不安というより好奇心の方が強かった気がします。一歩外を出ると見るものすべてが珍しく新鮮で、友達と一緒に行動する日々を送っていました。分からないことをすぐに聞ける友達やいろいろな支えもあって、少しずつ自分で成し遂げることに達成感を感じ始めました。気が付くと、今日は一人でどんな新しいことをしてみようかとわくわくしている自分がいて、そういう風に感じることのできる私自身の発見がすごく新鮮であり、嬉しかったです。

日本にいた時は、いくら練習を重ねても音色の引き出しを増やすことがなかなかできず、とても苦労していました。大学卒業後に留学をしようと考えていましたが、ハンガリーに留学をするとは思ってもいませんでした。そのきっかけになったのが、岐阜・リスト音楽院マスタークラスでピアノの先生に出会ったことです。当時、大学の4回生だったのですが、たまたま大学内でマスタークラスや、留学試験のことが書いてあるチラシを見つけました。在学中は、リストの曲を弾く機会が多く、リストといえばハンガリー(その時は、リストがハンガリーにあまりいなかったということを知りませんでしたが)。そのリストの国の人から直にその感覚を教えて頂くことができる。日本人の感覚とはまた違うことをそこで何か感じ取れるかもしれない、と思ったことが参加する理由でした。マスタークラスで先生のコンサートを聴くと、音色の多彩さや技術はもちろん、正確な音楽の中にある空間の自由さ、生きる音楽の流れ、どれをとっても私がその時探し求めているものばかりでした。驚きや感動が止まらず、演奏は終わってほしくないと思ったためか、コンサートは一瞬のように終わった感じをもちました。「この方に教えて頂けるのなら習いたい」と強く思いました。そして、いざレッスンが始まると、自分の中になかった感覚を学べる日々で、たった1週間ほどの猛練習の期間が過ぎました。この先生に、早くハンガリーで教えてもらいたいという気持ちが募り、もうその時には留学先をほかに選ぶ余地はありませんでした。ハンガリーでの先生の指導は本当に的確でわかりやすく、事細かく指導してくださるので本当に充実したレッスンです。感覚をつ

かめなく悔しい想いをしていて、レッスン中に暗い顔になっても、先生はユニークな発想でわかりやすく説明してくださるので、心が明るくなります。「音を楽しむ」と書いて音楽と読む。まさにこういうことなんだなと思いました。

ピアノのレッスンだけでなく、部屋の空間とピアノの響きの違い、時間の流れかたの違いなど、やはりここにいるからこそ感じる充実した毎日を過ごすことが多くなったように感じます。街中でハンガリー人のおしゃべりに耳を傾け、イントネーションなどを聞いて、「どういうニュアンスがハンガリーの曲に影響しているのだろう」と考えたり、時間がある限り乗り物に乗らず自分の足で歩き、いろんな物や音に敏感になったりしているいると思います。古き良き時代の建造物をみて感慨深くなったり、当たり前のようにあるものに疑念を感じたり、私生活の何気ないことが気になるようになるなど、自然にこういう音を弾きたいという想いをもてるようになり、意思によるタッチの違いだけで、こんな音が出るのかという発見に驚きました。

演奏会やオペラ、バレエなどにも何回も足を運び、いろんな芸術に触れ合う機会が多くなったこともあります。学生のコンサートでも多国籍の人たちの演奏で「国民性がでているな」と感じることも多くなりました。これは日本にいた頃の自分には感じることができなかったもので、自分自身の新たな発見もできたと思います。

その甲斐あってか1年目の夏にはイタリアのコンクールで1位を受賞することもできました。もちろん結果は嬉しいのですが、それよりも自分が音楽を通して伝えたかったことをその場ですべて出し、それが結果につながったことが本当に嬉しかったです。この経験は本当に私の中で大きく、自分の音楽に対する方向性が見えてきた瞬間でした。

2年目には大学院に入り、幸せなことですがほぼ毎日何かしらのレッスンがあり、座学、レッスン、試験の準備など、毎日の忙しさについていくのが必死でした。日本と比べ自分が出演するコンサートも多く、準備をしては演奏をする。大変ではありますが、本当に恵まれた環境の中にいるんだなと思います。

3年目の今、卒業のためのディプロマコンサートを控え準備に追われています。これまでの音楽人生で培ってきたこと、ここハンガリーに来てからいろんなことを直に見て感じたこと、それらによって得ることのできた引き出しから、自分らしさを忘れず音楽と真正面から向き合い、これからも一人の音楽家として、生きた音楽を披露できる奏者になれればと思います。

(やじま・ありさ)

日本人学校

ハンガリーでの新たな生活

渡辺　一輝

フランスからハンガリーへ。国が変わったことで大きく変化したことがありました。

一つ目は、全校生徒が約60人と聞いて、ものすごく驚いたことです。なぜなら、パリの学校では全校生徒が200人以上いたからです。家族で学校見学に来た時、印象的な出来事がありました。緊張していた僕が、6年生の教室で挨拶したとき、一人の男の子が、「どうも、どうも」と言って握手してくれました。佑一君です。初対面なのに、笑顔で迎え入れてくれたことは、今でも忘れられません。今までと違い、迎えられる側になって、初めて転校したことを実感しました。

初登校の日、正直不安でいっぱいでした。まだ、みんなのことを知らなかったので、「どうしよう」と戸惑いがありましたが、2か月程で不安はなくなりました。共通の趣味をもっている人もいたし、自分からみんなに流行らせたものもあります。何かと気が合う人や気軽に話せる人もできました。今では、学校に行くのがとても楽しみです。

二つ目は、勉強時間です。フランスでは、自分の部屋がありませんでした。しかし、ハンガリーの家には自分の部屋があり、勉強に集中できる環境です。そのため、勉強の時間が増え、自主学習に工夫を取り入れることができました。パリの学校に比べて人数が少なく、みんなで意見を出し合っていろいろな考え方を知ることができて嬉しいです。

もう一つ、変わったところがあります。それは、挨拶です。フランスに5年間もいたから今でもハンガリー人に会うと、「ボンジュール」とつい言ってしまいます。今もまだ、「ヨーレゲット」とすぐには言葉が出てきませんが、意識して言えるように気をつけています。ハンガリー人の人たちは、挨拶をすると笑顔で返事をくれます。お店でも店員さんがきちんと目を見て挨拶してくれます。だから、ハンガリーで挨拶をすると、とてもいい気分になります。ぼくは、世界のどの国にいっても、みんながあいさつをしていることに気がつきました。人と人とが関わるためには、挨拶がとても大切なことだとわかりました。

ハンガリーに来てみると、国によって、学校によって、いろいろと違う部分があることを感じると同時に、世界でも共通している大切な部分があることも知ることができました。

ハンガリーに来るときに自分なりの目標を立てました。それは、たくさんのハンガリー文化に触れることです。ハンガリーには、多くの世界遺産があると聞いています。自分にとって勉強になるので、そんな場所をいつか訪れてみたいです。また、ハンガリー語を覚えて、お店などで使ってみたいです。そうして、自分の経験を広げたいと思います。遊びも勉強も暮らし方も、パリや日本にいるみんなに自信をもって話せるような生活をしていきたいと思います。

(わたなべ・かずき)

ハンガリーから見つめる

實取　優樹

「ゴオォォゥ」。飛行機がハンガリーへ、僕と家族を乗せて飛んでいきます。そして、そろそろハンガリーへ着くころに僕と弟が言いました。「あっ、ハンガリーだ」。僕たち家族がハンガリーに着いたのは、2年前の8月4日の夜。それからハンガリー生活が始まりました。

僕が最初に気付いたことは、人の優しさです。例えば、電車に乗る時、道が分からなくて困っていました。ハンガリー人が英語で助けてくれたおかげで、家族みんなが安心することが出来ました。それから、僕たちはこの国のことをもっと理解したいと考え、ハンガリー語を勉強することにしました。ハンガリー語の辞書を読んだり、ハンガリーのガイドブックを読んだりして、理解に努めました。

そうして、ハンガリー語を勉強していくうちに、また新たなことに気付きました。それはあいさつです。例えば、僕たちが歩いていると、通りがかりの人が「ヨーナポート」と言ってくれます。それに、公共交通機関でもみんな「ヨーナポート」、「ヨーナポート」と言ってくれます。日本では周りの人にあいさつをする人をあまり見かけませんが、ハンガリーでは多くの人がだれにでもあいさつをします。これは、ハンガリーの素晴らしいところだと思います。

ハンガリーにいて気づいたことはほかにもあります。それはみんなが仲良く過ごしているということです。例えば、日本では最近、いじめやけんかなどの悲しいニュースがあります。しかし、僕がハンガリーの学校を見ているこの3年間、子どもたちがいじめやけんかをしているところを一度も見たことがありません。これはとてもすごいことだと思います。

ハンガリーに住んでいると、日本の良さも感じることができます。それは、ていねいさです。例えば、サランラップなどの製品を比べてみると、日本のほうがこわれにくく、使いやすいと感じました。また、料理に関しても、日本の和食は季節の食材を取り入れたり、いろどりよく盛り付けたりしてあります。最近、和食がユネスコの無形文化遺産に登録されました。これも日本の調理法や盛りつけのていねいさが世界に認められた証だと思います。だから、日本のものづくりの技術はとてもすごく、世界にほこれるものだと思いました。

ハンガリーと日本は、どちらの国もそれぞれのいいところがあります。だから、おたがいの国をもっとよく知ることができれば、おたがいの良さを学び合い、さらに良い国になっていくと思います。僕もハンガリーにもう少し住んで、ハンガリーと日本のことをもっともっと理解したいです。そうして、僕がハンガリーと日本の架け橋になれるように、これからも勉強、運動にはげんでいきたいと思います。

(みとり・ゆうき)

十一年間をふりかえって

カルドシュ　イロナ

みどりの丘日本語補習校に通い始めてから、11年の月日がすぎました。そして、私はやっと中学を卒業することが出来て、とてもうれしく思います。

私の両親はハンガリー人です。両親ともに日本語は話せませんし読み書きも出来ない、ごくふつうのハンガリー人です。私はその両親のもとに生まれました。

では、なぜ私が補習校に通うことになったのか、をここでお話ししたいと思います。

私がまだ幼稚園生だった時に、父の仕事の都合で家族全員が日本へひっこしました。私は、家の近所にある幼稚園へかようことになりました。この幼稚園は日本人の両親をもつ子供ばかりでした。そんな環境の中で、私は、楽しく通いながら、たくさんのお友達も作れて、しぜんに日本語も話せるようになったのです。そして、小学1年生になった時に、家族全員でハンガリーにもどってきました。そして、補習校に入りました。

4年を修了するころから勉強がたいへんになってきました。両親がハンガリー人なので、ほかのお友達とちがって、家に帰って宿題を手伝ってくれたり、分からないところを聴いたりすることができなかったからです。そのために、漢字や音読の勉強は、大変な思いをしながら勉強してきました。この苦労は一生忘れることが出来ません。

心に残っている一番の思い出は、小学5年生と6年生の時にチレベールツの夏合宿に参加した時のことです。みんなと一緒にゲーム等をやりながらときを過ごしたので、本当にたくさんの思い出を作ることが出来ました。新しいお友達も出来ました。後藤クリスティアンネさんです。今、彼女は高校生として補習校に通っています。

もう一つの思い出、それは、年に一度ある学習発表会です。今でも記憶に残っている発表といえば、中学1年時に中学3年生と一緒に演じた、夏目漱石の「吾輩は猫である」の劇、去年、中学2年時に演じた楽しくて面白い劇、そして、今年の「裁判員制度」という劇などを通して、さまざまな分野のことも勉強することが出来ました。

この補習校がなかったら、私がもしも通っていなければ、きっと今の私はどこにも存在しません。日本語はもう忘れていたことでしょう。

今日のこの卒業の日まで教えて下さった先生方、そして仲良くしてくれたお友達、私の勉強が出来るようにと11年の長い間、一生懸命になって補習校にかよわせてくれた、お父さんとお母さんにも、とても感謝しています。おかげで私はこんなに国語も日本語も出来るようになりました。そして、色々な行事をつうじて日本の文化にふれることができた喜びは、何にもかえることも出来ない、私だけの貴重な財産です。

11年間、ほんとうにどうもありがとうございました。

（カルドシュ・イロナ）

九年間を振り返って

望月　海央

僕はこの補習校に9年間も通いました。あっという間に過ぎ去ったと実感しています。一瞬に過ぎ去った9年間ではありましたが、毎週土曜日に補習校に来るのがとても嫌でした。なぜかというと、平日通っている学校の友達は土曜日の朝から休むことができます。僕だけ補習校があるために、一緒に遊ぼうと誘われてもいつも断らなければいけませんでしたし、補習校に来なくても良い友達は、土曜日の朝はゆっくり起きることが出来ても、僕は朝7時に起きなければならなかったからです。

9年目の今でも苦労しているのが、宿題を効率良くやりこなすことです。平日に通う学校の宿題に加えて、補習校で出される宿題も一週間のうちにやり遂げなければならず、それはそれでとても大変でした。

補習校に初めて来た日の事は覚えていませんが、1年生の時に出来た友達と一緒に過ごした時のことはよく覚えています。休み時間に、みんなと一緒に息が切れるまで走り回ったり、机から転げ落ちるほど一緒に笑ったりしました。でも、僕は小学1年生の頃は、泣き虫で臆病でした。今、だいぶ成長したことを自分のことながらも実感しています。

これまで仲の良い友達が日本へ帰国したり、新しい先生が来たりしたのを何度も見てきました。残念ながら、僕と一緒に1年生になったクラスメイトは、もう一人もいません。でもその代わりに新しい友達ができました。

僕が補習校で特に好きだったのは行事です。自分の実力を見せることが出来るカルタ大会。でも今まで一度も優勝は出来ませんでした。他の学年の子と仲良くなれる遠足や合宿、両親に一年間の学習成果を見てもらえる学習発表会。色々な行事に参加してきましたが、中でも僕にとって一番思い出に残ったのは、やはり学習発表会です。

小学1年生の時には、身体を使いながら漢字を表現して発表したことは、今でもよく記憶に残っています。中学1年生からは、3年間、毎年劇を通してたくさんの役を演じました。夏目漱石の役、女装をしてまでやり遂げた女役、今年演じた被告人の役、この中で一番気に入った役は女装をして演じた女役でした。でも皆さん、勘違いなさらないで下さい。僕は決して、そういう趣味ではありません。当日のリハーサルでも意見がなかなかまとまらないこともありましたが、本番は一番良い出来になったので、終わった後はホッとしたものです。何よりも学習発表会の後は、みんなとより仲良くなれたことです。

僕は将来、何になりたいのか、何をしたいのか、正直なところまだわかりません。日本語は母や祖父母の言葉ですし、ハンガリー語と同様に僕の母国語でもあります。母国語は出来て損はありませんし、将来きっと役に立つと思うので、これからも勉強を続けたいと思います。

僕は、これからも高等部で月2回、補習校に通います。高等部でも国語や日本の文化についてもっと理解できるように頑張りたいと思います。今までやさしく、時にアグレッシブに教えて下さった先生方、学校を支えてくださった運営委員の方々、そして、小学生の頃、毎週宿題に付き合ってくれたお母さん、補習校の授業料を払ってくれたお父さん、本当に9年の長い間、ありがとうございました。

（もちづき・みお）

答辞

畑山　去來

一段と暖かくなり、春の息吹と共に木々の緑が日増しに色づく季節となりました。

本日は、私たち卒業生3人の為に、お集り頂き、本当にどうもありがとうございます。

3年前の4月。私たちは、そのキラキラ光る日差しの中を、中学生への期待と不安が入り混じる複雑な思いで入学式を迎えました。

初めての中学生としての勉強。色々と思うところもあった3年間でしたが、気づけばもう中学生を卒業しようとしています。そして、私の心の中には数え切れないぐらいのたくさんの色々な思い出が昨日のことのようによみがえってきます。

日差しの強さに初夏を感じる6月、私たちは全校生徒揃って、夏合宿に参加しました。山の中にあるホテルで1泊しただけでしたが、みんなと一緒に行った数々のアクティビティは、とても楽しかったです。そして、これを通して他学年の友達と協力し合い、一致団結しながら成し遂げた時の達成感も味わうことができました。何よりも今年は、中学3年生として、縦割り班の中にいる下級生を引っ張っていく立場となり、とても良い経験になりました。

紅葉の便りがここかしこに感じられ始めた10月、私たちは日本人学校の児童生徒の皆さんと一緒に、運動会に参加しました。運動会では、みんなと一緒に力を振り絞って頑張りました。中には負けた競技もありましたが、みんなと力を合わせて成し得た勝利は、何にも代え難いものでした。

あまり雪が降らなかった今年の1月に行われたカルタ大会。そのカルタ大会に向けて、みんな一生懸命練習をしました。そして、中学生はいつにも増して必死でした。なぜなら、今年から中学生は俳聖かるたではなく、百人一首で対戦することが決まったからです。中学生全員、百人一首は初めての経験でしたので、練習にはとても気合いが入っていました。結果はどうであれ、練習の甲斐もあり、全員で楽しみながら競い合うことが出来ました。

そして、冬の名残りが去り始めた2月には、学習発表会がありました。今年の中学3年生は、中学一年生と合同で学習発表会に挑みました。学習発表会では、「裁判員制度」の劇をやると決まった後は、練習に練習を重ね、そして何度も修正を重ねて本番に向けて真剣に頑張りました。その甲斐もあり、そしてみんなが一生懸命練習に励んだこと、そして先生たちの献身的な協力があったお陰で立派な劇に仕上げる事が出来ました。

これらだけではなく、私たちの成功の裏にはいつも先生がいました。今、ここで感謝の気持ちを表したいと思います。本当にどうもありがとうございました。

みどりの丘補習校は、私たちに様々なことを学ばせてくれました。ハンガリーに居ながら日本の学校で使っている教科書を用いた学習。そして、日本に居るのと遜色ない国語の授業を受けながら勉強をすることが出来ました。今日のこの日まで教えて下さった先生方には感謝してもしきれません。

最後になりましたが、素晴らしい出会いと経験をさせて頂いたみどりの丘補習校に対して、今後より一層のご発展を願います。

心から感謝して答辞といたします。

（はたやま・さらい）

ハンガリーゴルフ回想録

坂下　昌平

2014年4月5日　武蔵丘ゴルフコースでラウンドを終えた私は、その名の通りのゴルフ場を抱く丘陵地帯を見下ろすことができる大浴場の風呂に入っていた。静かに目を閉じ本日の反省の時間だ。今日は少し春風があったものの、天候は上々、コースにはあちこちで桜が満開となり、プレイヤーの目を楽しませてくれる最高のコンディション。そんな中、ドライバー、ショット、パターもいつになく好調で出だし3ホールをパープレイでまとめることができた。前半４１、久々の好成績、この調子で後半も回れば･･･。と思ったもつかの間、後半に入りアイアンがあたらなくなり、パー無しというありさまで、後半５０。結局あがってみればいつもと大差ない成績となってしまった。理由はある。ゴルフ場までの渋滞、ゴルフ場も混雑し毎ホール待たされる、ハーフ休憩に飯を食う習慣、メートルではなくヤード表示、コースが狭いetc。それはつい3月までラウンドしていたハンガリーのゴルフ環境と大きく違っている･･･。

私のハンガリー日本人会ゴルフ部の在籍は丸3年、2011春から-14年春まで。2010年の秋に初めて海外赴任でこの地に異動し、そのシーズンは1度だけOLD LAKE GCに同僚につれてもらったきり終わってしまった。社内でのゴルフ環境といえばする人はいたが、少数であり、あまり盛んではないようであったので、翌年赴任時に日本人会のHPで見つけてあったゴルフ部に入ることを決心し、2011年の春から月例会に参加させてもらうようになった。

月例会では数々の企業からゴルフの好きな方が参加されていた。また、月例会以外にもいろいろなイベントが運用されており、和気藹々と皆さん楽しまれており、それ故、新入部員である私は、人見知りな性格も手伝ってちょっと溶け込み難い雰囲気を当時感じたのを記憶している。

そのようなマインドを変えるきっかけとなったのがその秋の大吉杯マッチプレー選手権にエントリーしたことであろう。大吉の店主がしきりに誘うので、半信半疑で出場してみたが、見事にはまった。マッチプレーのそのものは初体験であったが、運よく3回戦まで勝ち上がることができた。勝ち負けもさることながら、対戦相手と18ホールに渡る真剣勝負の中で、深くお互いを知り合うことができる貴重な体験だ。共有した特別な時間はいつまでも2人の心に刻まれる。その後全部で5回マッチプレーに参加させていただいたが、試合後、そのほぼ初対面に近い対戦相手全ての方と打ち解けあい、交流を深めることができた。また、そのマッチプレーと同時期の10月の月例会でもたまたま優勝したこともあり、ゴルフに対するモチベーションが大きく上がった初年となった。

このような前シーズンを経験し、2012年は春から日本人会のホームコースであるパンノニアＣＣのメンバーとなり本格的にゴルフを行うようになっていった。

3月のシーズン開始より私は休日の多くをパンノニアで過ごすようになった。これは本当のゴルフ好きが集まる"週末ゴルフ"の会に参加するようになったからだ。基本その会には単身赴任者がゴルフの上達に加え、健康と暇つぶしを兼ねてたむろう場であるがどうしてもゴルフを上達したかった私は家族帯同者でありながら単身者より多く参加し続けた。結果はすぐに出た。参加初めて2ヵ月後の5月にいきなりスコア８０がでたのだ。これで私は調子に乗った。この年初めて4カ国対抗戦に参加させていただいた。チェコでの開催だった。本番当日、調子に乗っていた私は、「スタートホールはアイアンで」という前日の作戦会議での合意事項を破り、1組目ティーオフ直後にドライバーを持って池に叩き込んでしまった。最終的に団体戦はホームであるチェコチームにかなりの差で2位に甘んじることとなった。この行動が多少なりとも勝敗に影響していたかもしれない。帰りのバスの中でもう一人の違反者とともに深く反省をした。4カ国に関しては、次年2013年は前年の反省もあって、なんとしても雪辱を果たすため、幹事としてコース下見合宿や連休会の開催を積極的に行った。が、またチェコに僅差で及ばず2位であった。こうなったら2014年はシーズンオフからイタリアでキャンプをスタートさせ準備万端だ。今年こそは地元ハンガリーでの開催で皆さんに悲願の優勝を果たしてほしい･･･。

ゴルフ部ではまあとにかくたくさんのイベントがあり、お陰様でストレス多い海外生活を無事乗り切るだけでなく充実したものとすることができました。ゴルフに興味のある皆様は是非参加してみてください。私の様にはまってしまうかもしれません。

3月末　2014年1回目月例会の後に、盛大な送別会を開催いただき私のハンガリー生活は幕を閉じました。今日本に帰り、日本人ゴルフ部の皆様とハンガリーで出会い、素晴らしい環境で、一緒にゴルフを思いっきり楽しめて本当に幸せだったと改めて感じています。今後もどこかで皆さんとゴルフを行える日を楽しみにしています。

（さかした・しょうへい）

日本人ゴルフ部年間行事

＜月例会＞　於 PANNONIA G.C.

- 第1回 3月23日(日)08:30
- 第2回 4月13日(日)08:00
- 第3回 5月11日(日)08:00
- 第4回 6月08日(日)08:00
- 第5回 7月13日(日)08:00
- 第6回 8月03日(日)08:00
- 第7回 9月14日(日)08:00
- 第8回 10月5日(日)08:00
- 第9回 11月2日(日)08:30

＜「大吉杯」マッチプレー選手権＞

- 第20回（春季大会）4月～7月
- 第21回（秋季大会）8月～10月

＜四カ国対抗戦＞　オーストリア、チェコ、スロバキア、ハンガリー6月29日（日）　開催国幹事：ハンガリー　　於PANNONIA G.C.

＜年代別対抗戦＞　9月～10月

＜ゴルフ部員募集＞

上記年間行事の他に毎週末2～3組がプレーを楽しんでいます。真冬でも積雪のない限りプレーをしている"ゴルフ狂の集い"もあります。入部希望者は、高松(Eurasia) e-mail: yoshhiro.takamatsu @eurasia.hu まで。

ゴルフ部

V4 友 Japan Exchange Year 2014

真珠の輝き！ ドナウの名門

ハンガリー国立フィル

ハンガリー国立フィルハーモニー管弦楽団

Hungarian National Philharmonic Orchestra

General Music Director: Zoltán Kocsis

Conductor Laureate: Ken-Ichiro Kobayashi

ブダペスト国際指揮者コンクール
優勝40周年記念

ハンガリーがその才能を発掘した
“炎のマエストロ”8年ぶりの共演！

桂冠指揮者 小林研一郎

ハンガリーが誇る世界的巨匠

音楽総監督・指揮
ゾルタン・コチシュ

ハンガリーの血を引く若きサムライ
バルトーク国際コンクール優勝！

ピアノ
金子三勇士

日本を代表する
人気ヴァイオリニスト

ヴァイオリン
千住真理子

© Satoru Mitsuta　© K. Miura　© 冨田眞光 (Vale)

2014年
6月23日（月）19:00開演
7:00p.m., Monday, June 23 at Suntory Hall

リスト／コチシュ：ゲーテ記念祭の祝祭行進曲
リスト：ピアノ協奏曲第1番（ピアノ：金子三勇士）
ブラームス：交響曲第1番

Liszt/ Kocsis: Festmarsch zur Säcularfeier von Goethes Geburtstag, S.227
Liszt: Piano Concerto No.1 in E flat major S.124 (Piano: Miyuji Kaneko)
Brahms: Symphony No.1 in C minor Cp.68

6月26日（木）19:00開演
7:00p.m., Thursday, June 26 at Suntory Hall

グリンカ：歌劇「ルスランとリュドミラ」序曲
チャイコフスキー：ヴァイオリン協奏曲
（ヴァイオリン：千住真理子）
チャイコフスキー：交響曲第6番「悲愴」

Glinka: Overture “Ruslan and Lyudmila”
Tchaikovsky: Violin Concerto in D major Op.35
(Violin: Mariko Senju)
Tchaikovsky: Symphony No. 6 in B minor Op.74

サントリーホール

料金=S¥13,000 A¥11,000 B¥9,000 C¥7,000 D¥5,000 夢倶楽部会員=S¥12,000 A¥10,000 B¥8,100 C¥6,300 D¥4,500
1月19日(日) 10:00 前売開始 ジャパン・アーツ夢倶楽部会員：WEB 1/11（土）・TEL 1/12（日） ジャパン・アーツぴあネット会員：WEB 1/13（月）

主催：ジャパン・アーツ／日本経済新聞社　後援：ハンガリー共和国大使館／日本ハンガリー友好協会／外務省

お申込み　ジャパン・アーツぴあ (03)5774-3040　www.japanarts.co.jp　サントリーホールチケットセンター 0570-55-0017
チケットぴあ pia.jp/t 0570-02-9999 [Pコード218-308]　イープラス eplus.jp　ローソンチケット 0570-000-407 [Lコード38691]　東京文化会館チケットサービス (03)5685-0650